古しい教句

杦

お

玉葉雑二　浦あれて風よりのほる塩けふり　おろさぬ舟に波そよすなる　萩原法皇

拾玉集四　とふ人よみのゝおのみちのもらぬを　おとしてみえそやみたをとめ

金葉夏　五月雨に入江のはしもかきぬれは　おちもとらて見えこそすれ　三宮

同雑上　あまの子はまたよかけてあまませは　おきそいてまつのおもひてたれ　よみ人しらす

新拾秋上　風寒み衣うつなり入江より　おくよりはけて露そこほるゝ　陽子内親王

新後拾羇旅　富士の嶺をふりさけみれは白雲に　おもへはつくしまつの葉　藤原忠秀

新続古秋上　露となりてそ袖をしつて秋の野の　おもひの浦の今日も露けさ　中納言為忠

続古雑中　いかさる野やむなしと鎖さへみえさせん　おもひよきまつ浦松の神立　土御門院内侍

新続古秋上　秋風は我後さへさそひけれ　おもかけにあまの袖の夕露　前参議雅有

玉葉雑一　出る日も入る日もおなしむかしの　おもかけとまる秋の夜の月　法印親海

新後拾雑秋　夕されは野田のかりかね鳴なる　おもかけそけて秋風そ吹　為道朝臣

玉葉秋上　まつ秋の夕まくれ一つのむしむかし　おもかけのかすかなる月影　従二位親子

拾玉集四　尾上よりさそはれ来る節花　おもかけのみの風のまにまに

続古羇旅　信濃なる安野の嶺のさしかつ袖ぬれて　おもかけのみにきるふる袖　前大納言経宗

続後秋上　来りそよきそ野の宿は　おもかけて雲を誘て　大江親重

新千秋上　ものおもふそよきの月に　おもかけてそよ露のやと　従三位氏久

玉葉秋上　露おもるこのまくらもしほれ萩の　をはなかすゑをふきみたれけり　藤原冬経朝臣
新後秋上　夕されは秋風吹てくさの原　をはなかうへに露そこほれて　従二位行家
拾玉集二　ねやのうへにあれとたになかりける　をはなかもとにうつら鳴なり
同一　女郎花なまめく野への秋の色は　をはなかもとにほのめきにけり
続後撰羇旅　行とまるところとては東路の　をはなかもとにやとりかるらん　寂縁法師
新勅撰恋二　津の国のこやとも人にいひもせて　をはなかもとにかくれすみけん　右近中将公衡
続千載雑秋　とはれぬる人のことさへ月の影　をはなかもとにやとるなるらん　信実朝臣
新続秋下　なかむるはかけさへ月の夕露に　をはなかうへにやとる夕風　藤原家経
続古秋上　むさし野は月の入へき峯もなし　をはなかすゑにかゝる白雲　大納言通方
拾玉集三　まねくとて袖の人めの夕くれは　をはなかすゑに風そふきける　後嵯峨院宗尊
続古秋上　山なるる秋をまてもかけて　をはなかすゑによるの秋風
月清集上　ふくかせは浦波の月見も嵐　をはなかすゑにちる白浪
同　ふきのこす八重の道の月を見て　をはなかもとのむしの声かな
玉葉旅　草枕ひとよのかけの露ならし　をはなかもとをたつねてもみん　西園寺入道前太政大臣
風雅秋上　あさ露のふるにぞむしの声そらし　をはなかもとにすゝむしの声　前大納言為兼
続撰秋下　あはれなりまたはつかりの声そしる　をはなかすゑの秋の夕くれ
拾玉集一　このむらのまつはうつろふ風なれや　をはなかすゑを吹あらしかな
壬生二百上　思ひきやゆふへの露のゆくへかな　をはなか袖もうらみかほなる

続拾冬　霜かれの浅茅かいろもつれなきを　をはなそあきのかたみなりける　小侍従
風雅秋上　露すかれ野辺の萩はまたなれて　をはなそ秋の風にまかせて　前大納言実氏
金葉秋　うつりゆくそのかけみれは　をはなかなひく秋のゆふくれ　源俊頼朝臣
新拾冬　まほろしや入海かすみなるものを　をはなの雪のふりつもる月　前大僧正実超
風雅冬　外山より木の葉ちりしく庭なれて　をはなかもとのゆきのしら雪　院冷泉
玉葉秋上　夕くれに山のはのまた残るとて　をはなかもとにひらくあきの風　太政大臣実有
新続古秋上　鵜のなく野辺の草の月の夕ほとに　をはなかすゑの秋の夕風　前大納言為氏
続拾羇旅　草枕ひと夜の旅の袖ぬれて　をはなかすゑのかりのなく声　大江親重
風雅秋上　うちむすふ草のまくらに秋風の　をはなかすゑにまよふ白露　よみ人しらす
山家集上　雲の浮くもりのしたよりしはし　をはなかすゑに月はみえつゝ
続古秋上　棹姫の霧のまくらにも旅の夕　をはなかすゑに宿月影　従二位家隆
新古秋上　山縁花もかくのかくれなき　をのへの花のみねの月　菅原孝標女
詞花雑下　いかにせむ浜の露はつきにけり　をのへのまつの秋の夜の月　前大納言公任
続拾雑秋　みてもなほうかれしあきのかれの　をのへの月に風のまもりて　八条院高倉
月清集上　露よりもなほふかき梅の香の　をのへの月にかすむ秋かせ
拾玉集四　花さかりなかきしはしのまくらして　をのへの月にそらもかすみて
新古秋上　てりもせすくもりもはてぬ春の夜の　をのへの月にかすむ山の端　大江千里
壬生二百上　あかつきを露のしたくれ山のはに　をのへの月の影そさしける

月清集上　清見かたゝには霞八重ならん　おほろ月夜にかすむ波かな

新古春上　いまはとてたのむのかりもうちわひぬ　おほろ月夜のあけほのゝ空　寂蓮法師

月清集上　ここのへにおほくの春をすくしきて　おほろ月夜にかすみぬるかな

続後拾春　やまさとはきえのこりたる雪もなし　おほろの清水すみそまさる　前中納言匡房

拾玉集六　浮世にはすまぬ心ハ大原や　おほろの清水くもるときなし

新千雑中　待えたる雲井の月の影そへて　おほろの清水むすふ秋かな　寂然法師

続拾遺雑三　住人もありとやいかに月もうつらん　おほろの清水むすはれて　良暹法師

新千雑中　たつねきてそむかぬ秋のよをそへて　おほろの清水すまぬ行へや　法印定円

玉葉恋二　汲みてしる人もあらなん月影の　おほろけならぬ心ありとは　経信

新古恋四　あひ見てもなほなくさまぬ月影の　おほろけにやはあはれとも思ふ　天暦御哥

新葉羇旅　伊勢の海や浪のよるへの浦の月　おほろけならぬ夜半のなくさめ　よみ人しらす

拾遺恋三　あまの原かきくもりたる月のかけ　おほろけにやは人のこひしき　同

千載雑上　露しけき蓬か中の虫の音を　おほろけにてや人のたつねん　紫式部

花宴　ふかき夜のあはれをしるも入月の　おほろけならぬ契とそ思ふ

玉葉誹諧　おもひやる袖とあらはれ見えぬらん　おほろけならぬ深き心は　前大納言為世

新後人数　まつの露はら雲をなかれ流るゝ　おほろのかけも月のやとりは　源兼氏朝臣

金葉恋下　うらむとも誰にかいはん月の影　おほろけならぬ雲まよふらん　大江匡房

新後拾恋一　人しれす思ひそめてし心さへ　おほろけならぬ恋となりけれ　参議長

続後撰恋三　夜半さへ我待わふる月なれや　おほろけならぬ雲のかけは　前大納言為家

続拾遺雑下　まつ宿にやすらふ月もまたひとり　おほろけにてはみえし秋かな　宣旨

拾遺愚外上　春の夜の月の光のかけはれて　おほろけならぬ物思ひもなし

拾遺雑下　世中にあらし思ふもまたかなし　おほろけにかれはちらぬ世そあらなん　恵慶法師

新古雑中　世の中をそむくはかりはかたからて　おほろけにてや住よかるらん　和泉式部

続拾遺雑三　思ひしるとこそ人はいはれけれ　おほろけにやは我の秋のゆふくれ　藤原国房

同冬　ありつゝもきえぬるはかり白雪の　おほろけにやはふる雪のむもれ　よみ人しらす

壬生二家中　ゆきかへりてもなかめはよのみかは　おほろけのへにさけは萩なる

続千秋下　あはれともいつかとまらて秋の露よ　おほろけのむしの声そまされ　右大臣隆博

新拾秋上　なへて咲く野辺の花にも女郎花　おほろけのへにうつろひにけり　清原元輔

古今秋上　花にゆきて見るにあかねは女郎花　おほろけのへにねなましものを　平さたふん

新後秋下　鶉の床はひとつきにしも鳴なれ　おほろけのへの松虫の声　権大納言経継

新拾秋下　名にめてて折るはかりそ女郎花　おほろけの風に打なひくらん　藤原雅家朝臣

新古羇旅　ちるまくらかへ思ひてなかむれは　おほろけにやはそてを草　中納言兼輔

後夜四　あをによし秋の月にはなかむれて　おほろけのことおもひやすらむ

拾遺　ゆきかへりなとまねかせたるつゆの　おほろけにやはあはれなりける

続撰恋中　ものおもふ人のいはれぬ宿のうちに　おほろけにては我をこふらし　よみ人しらす

続拾遺恋　足引の山ほとゝきすなくこゑに　おほろけにては秋そかなしき　道命法師

續後撰恋六　いつとてもあはれ[illegible]　おほつかな[illegible]　南院式部卿のむすめ

拾玉集三　われも人もあはれ[illegible]　おほつかなき世の契[illegible]

沖法　つれなさも[illegible]今はおもひ捨　おほつかなき秋のよ[illegible]

拾遺恋中　うけ[illegible]月[illegible]　おほつかなき秋乃此の[illegible]

續後撰恋四　君[illegible]世[illegible]　おほつかなきを[illegible]や　忠房卿

拾遺恋二　君[illegible]世[illegible]　おほつかなき[illegible]や　藤原忠房卿

續後撰秋中　秋[illegible]山　おほつかな[illegible]　貫之

同秋下　秋[illegible]　おほつかな[illegible]

同恋中　[illegible]　おほつかな[illegible]　同

古今恋上　遠近の[illegible]山中に　おほつかな[illegible]　中納言朝忠

新續拾恋四　今年[illegible]山乃郭公　おほつかな[illegible]

拾遺恋　[illegible]　おほつかなくも[illegible]　藤原實方朝臣

新續秋下　[illegible]　おほつかな[illegible]　前中納言為方

風雅恋二　今[illegible]　おほつかな[illegible]　藤原元真

續後拾遺雜一　[illegible]月[illegible]　おほつかな[illegible]　右近大将道綱母

續後撰覊旅　[illegible]　おほつかな[illegible]　西行法師

風雅旅　旅衣[illegible]　おほつかな[illegible]　康資王母

新千恋四　[illegible]　おほつかな[illegible]　[illegible]

續拾遺恋三　思ひ[illegible]　おほつかな[illegible]　右[illegible]

總角　[illegible]雲[illegible]　おほつかな[illegible]

新古恋五　[illegible]　おほつかな[illegible]　天暦御哥

同恋一　[illegible]　おほつかな[illegible]　徽子女王[?]

拾遺恋三　[illegible]　おほつかな[illegible]　藤原[illegible]

掛　[illegible]　おほつかな[illegible]

新續古今　[illegible]山郭公一[illegible]　おほつかな[illegible]

新古恋二　[illegible]　おほつかな[illegible]　権中納言雅縁[?]

拾玉集二　[illegible]女乃[illegible]　おほつかな[illegible]　讃岐[?]

同四　[illegible]　おほつかな[illegible]

大和物語　[illegible]　おほつかな[illegible]

拾遺恋　[illegible]　おほつかな[illegible]　よみ人しらす

續後撰　[illegible]山の[illegible]　おほつかな[illegible]　藤原頼輔

續後撰　[illegible]　おほつかな[illegible]　藤原家隆

新千秋下　[illegible]　おほつかな[illegible]秋[illegible]　宇治入道前関白太政大臣

拾玉集六　[illegible]山[illegible]　おほつかな[illegible]

同七　[illegible]　おほつかな[illegible]

壬生二品上　[illegible]秋[illegible]　おほつかな[illegible]

新後拾雑秋　すてもみよ雲ゐにすめる月かけの　おほろにかすむ一むらの雪　中宮上総

新勅雑四　しらくものやへにかさなるをちにても　おほかたはやまとにかへるこゝろそ　中納言兼輔

大和物語　しらくものなかにまかれし　おほかたはやまとにかへるこゝろそ

続拾雑春　今はまた花のちりなむ　おほかたはやまとの春の　後嵯峨院御製

詞花春　九重にまた知らしめし雲とみて　おほろけの世の人のあかぬ　新院出雲

山家集上　秋もすみ嵐の山に風さえて　おほゐ河のとかに氷るなく

長秋詠藻中　一つすゝ秋のさかりにこそ見しも　おほかたの月にまかせて

新千載上　あさ霧のめくみてまちし　おほひくさ

後撰賀　山人のこれるたきゝは君かため　おほくの年をつまんとそ思ふ　今上御製

月清集下　風かよふ　おほろ月

後撰恋五　かきくらす　おほかたは　よみ人しらす

拾遺冬　年ふれは　おほえぬ

続後撰雑　大納言経親

拾遺恋三　数ならぬ身を　よみ人しらす

壬生二承下　わたの原八十嶋かけて

竹河

新拾秋上　風わたる　那世親王

拾遺恋中　ちるまては

月清集上　白雲の八重立山の峯にしも　おほかた

同

拾玉集三

新古秋上

同形冬

拾遺雑上

続後葉

拾遺恋一　いそのかみ

新葉冬

新後拾

続千載上

続古今上

新勅恋

新勅秋下

新後撰雑

続後撰雑

新勅賀

壬生二承中

続後拾遺 神祇　霜さむき(?)…　おほ…　御製

新続古今 雑上　あけぬれば三世の仏のみなもとを　おほ…　鴨長明

拾遺集 三　こゑたてて…　おほ…　よみ人しらず

新勅撰 雑四　みなせ川…　おほゐ川…

伊勢物語　ちはやぶる神の斎垣も…　おほ…

続千載 三　…　おほ…　読人しらず

壬生二品(?) 上　…　おほ…　津守国冬(?)

続後拾遺 春下　…　おほ…　従二位家隆(?)

新葉 秋下　…月…百敷の…　おほ…　平兼盛(?)

拾遺 哀傷　…行の…　おほ…　大納言(?)…

新千載 四　…　おほ…　侍賢門院堀河(?)

千載 羇旅　逢坂の…　おほ…　[illegible]

続後拾遺 雑下　…　おほ…　藤原基俊(?)

新拾遺 雑秋　…　おほ…　[illegible]

月清集 上　…　おほ…

続千載 雑中　…　おほ…　太宰権帥實香(?)

新続古今 哀傷　…　おほ…　従二位行教(?)

拾遺愚草 上　…　おほ…

拾玉集 一　人さそふ深山の嵐の音すれて　おどろかれぬる…

続千載 冬　限ある月日のみねて…　おどろかれぬる…

拾玉集 四　…　おどろかれぬる秋の初風

同 又　つれづれと…　おどろかれぬる…

続拾遺 雑下　…　おどろかれてのこる…　権大納言実国(?)

続後撰 羇旅　…　おどろかされやおもひあへず…　藤原信実朝臣(?)

新拾遺 羇旅　…　おどろかされていそぐ旅人　[illegible]

続後拾遺 羇旅　…旅の…　おどろかされて…　[illegible]

山家集 中　…　おどろかれてぞ…

新千載 秋下　小山田の…　おどろかされて…　西行法師

新勅撰 雑三　…　おどろかされて…　大納言實家(?)

金葉 雑下　…　おどろかされて…　[illegible]

新古今 哀傷　…　おどろかして…　中宮…(?)

新葉 雑　…　おどろかして…　刑部卿頼輔(?)

新続古今 雑　…　おどろかして…　権大納言為世(?)

同 雑上　…　おどろかして…　従二位行文(?)

新後拾遺 …　…　おどろかして…　太上天皇

続拾遺 雑下　…　おどろかして…

新続古今 羇旅 [illegible] 前大僧正公豪

続拾遺 恋三 [illegible] よみ人しらず

新続拾遺 恋四 小山田の [illegible] 秀能法師

玉葉 恋 [illegible] 前大納言有房

続拾遺 雑上 [illegible] 前大納言為経

新拾遺 冬 [illegible] 赤染衛門

続拾遺 冬 松の葉 [illegible] 大江資朝

新拾遺 哀傷 世間の [illegible] 前大僧正慈鎮

新千載 恋 [illegible]

続後撰 雑下 [illegible] 平政村朝臣

新続古今 羇旅 [illegible] 源秀春

新拾遺 恋三 [illegible] 源師光

山家集 下 [illegible]

拾玉集 二 [illegible]

新後拾遺 雑下 [illegible]

新後拾遺 雑 [illegible] 藤原家経

拾玉集 四 [illegible] 心海上人

壬生二百首 上 [illegible]

古今 秋上 女郎花 [illegible]

風雅 冬 [illegible]

月清集 上 [illegible]

新古今 恋三 [illegible]

続拾遺 秋中 [illegible]

壬生二百首 上 [illegible] よみ人しらず

続拾遺 [illegible] 和泉式部

風雅 秋上 [illegible]

新古今 冬 [illegible] 藤原清輔朝臣

拾遺愚草 [illegible]

新続古今 [illegible] 権大僧都[illegible]

千載 雑上 白雲 [illegible]

続千載 雑上 [illegible]

新勅撰 [illegible] 太政大臣[illegible]

拾遺愚草 [illegible]

長秋詠藻 上 [illegible]

続拾遺 秋下 [illegible] 順徳院御製

新葉集 上 [illegible]

新後拾遺三 [illegible]の白玉 右衛門督[illegible]
後拾遺雑上 [illegible] 源[illegible]
壬生二 承中 吉野なる山松の[illegible]の月 太政大臣
新後拾遺春下 桜[illegible]
古今春下 [illegible] 前大納言為世
新後拾遺夏 [illegible]雲 洞院摂政左大臣
後拾遺下 [illegible] [illegible]
同秋下 [illegible] 衣笠内大臣
後拾遺秋下 立田姫[illegible]
月清集下 [illegible]
新後拾遺夏 山賊の[illegible] 栄仁親王
拾玉集三 [illegible]
金葉集 山里の[illegible] 権僧正永縁
新後拾遺冬 [illegible] [illegible]
拾玉集四 [illegible]山里
玉葉恋四 [illegible] 権中納言敦忠
新古今雑上 み[illegible] 御形宣旨
新後拾遺雑 逢事を[illegible]月 橘則長

後拾遺雑五 いつまでか雲井の[illegible] 信実朝臣
金葉秋 秋[illegible] 藤原行家
拾玉集二 [illegible]
千載雑 [illegible]
後拾遺恋二 [illegible] 江侍従
新後拾遺雑春 [illegible] [illegible]
月清集上 [illegible] [illegible]
後撰恋二 [illegible]
新葉恋一 [illegible] [illegible]
玉葉冬 [illegible]
金葉雑下 [illegible] 藤原有[illegible]
拾玉集五 [illegible]
千載恋 [illegible]
後拾遺恋一 限りあれば[illegible] [illegible]法師
拾遺恋五 [illegible] 権中納言[illegible]雄
後撰恋 今日[illegible]
後撰集哀 袖[illegible] [illegible]
哀[illegible]
金葉別 [illegible] 藤原[illegible]

続千載恋一 [illegible] [illegible]
後拾遺雑三 [illegible] [illegible] 源経信
金葉秋 [illegible] [illegible] 太宰大弐長実
新拾遺 [illegible] [illegible] 後京極摂政
後撰賀 [illegible] [illegible] 右大臣
千載哀傷 [illegible] [illegible] 弁乳母
金葉春 [illegible] [illegible] 中納言雅定
月清集 [illegible] [illegible]
続後拾遺雑 [illegible] [illegible] 藤原長経
続千五百番 [illegible] [illegible] 法眼親瑜
風雅恋四 [illegible] [illegible] 隆信朝臣
後撰恋二 [illegible] [illegible] 大輔
新続古今 [illegible] [illegible] 従二位行家
伊勢物語 [illegible] [illegible] 赤染衛門
風雅春上 [illegible] [illegible]
伊勢物語 [illegible] [illegible]
続後撰恋三 [illegible] [illegible]
続古今雑下 [illegible] [illegible] 正三位頼氏

玉葉春下 [illegible] [illegible] 亀山院御製
同 [illegible] [illegible] 小式部内侍
後撰秋中 [illegible] [illegible]
壬生二百下 [illegible] [illegible]
拾遺秋 [illegible] [illegible]
壬生二百上 [illegible] [illegible]
風雅春下 [illegible] [illegible] 摂政太政大臣
古今春上 [illegible] [illegible]
壬生二百上 [illegible] [illegible]
風雅恋四 [illegible] [illegible] 源道済
新古今雑上 [illegible] [illegible] 源重之
続古恋一 [illegible] [illegible]
玉葉雑二 [illegible] [illegible] 白河院御製
月清集上 [illegible] [illegible] 俊恵法師
松玉集一 [illegible] [illegible] 西行法師

拾玉集六　日吉のや杉はさかきとさかえけり　をりあはれなる住吉の道　俊成

同一　すゝ虫のなく音しけき時雨哉　をりしもあれや小倉の風

新続古今雑下　見る人はけふの雨にそ散りぬへき　をりしもまたぬ梅さくらかな　よみ人しらす

風雅雑上　霜のゝち川辺のさくら散りにけり　をりしも日影見えて冬枯　前中納言定家

同秋下　夕暮の萩の下葉の一枝を　をりしもひとの手にそかけける　伏見院御製

壬生二百中　かへりても誰か人にも折梅の　をりしも枝に鶯の声

拾玉集一　夏の夜はあけかたにこそ富士山の　をりしもかすむ月の影哉

後拾遺雑一　ありあけに月はのこりて夜もすから　をりしもまたぬ花の初雪　小大君

拾玉集三　初花ともなしあはれ忍ふの　をりしもやすらひ来る春の風

金葉雑上　みかさ山吉野の山のさくら花　をりしも霞の紅の影　源定信

新古今春上　嵐ふく岸の柳のいなむしろ　をりしく浪にまかせてそ見る　崇徳院御製

玉葉夏　郭公なくやさつきの短夜も　をりしもみやまの谷の松の木　九条左大臣

月清集下　月の夜の影をかけつゝ秋の夜は　をりしも風の音寒き月

拾玉集七　さよ更て待つ人あらは松風の　をりしもさやか袖の浦波

新後拾遺秋下　霜おけは小雲の夕も更にけり　をりしもおきそふ秋の朝露　贈従二位為子

拾遺哀上　七夕の手にもゆるまてゆふたすき　をりしも袖にかゝる白露

続古今春上　鶯も花をもかさねて鳴声や　をりもこそすれぬる春の山　上東門院

同恋下　心あらは風も吹かなん待ち侘ぬ　をりなさけなき人の心を　源俊頼朝臣

後拾遺春上　まれにくる人は花の盛にて　をりはへてさく山桜かな　上東門院中納言

詞花賀　わかその梅の枝は人の折はや　をりて見るへき花の色かな　中務

風雅賀　わかそのゝ花をも見よと思ふらん　をりしも君か千代の春哉　同

新千載雑下　山桜ちりまかひてや家路には　をりしも人のきてそ見る　よみ人しらす

新勅撰雑上　色香をもあはれしる人なかりせは　をりしもやかて梅を見ましや　藤原為家

新後拾遺雑上　梅雨の晴間も見えぬ山の端は　をりしもたまく露もゆかしく　順徳院御製

山家集上　花乃枝の露に匂ふや春の色　をりしも帰るかりかねの声　西行

玉葉春下　咲とはいつも霞かくるゝ梅なれや　をりしもかをる春の夕暮　藤原為教

続後拾遺春上　散りまかふ花のゆかりにいひにほふ　をりしも軒端に風ふけは　大僧正慈鎮

山家集上　春のよは花の木陰にかり枕　をりしもさやけき月の影哉

拾玉集一　世の中はかなしき袖に涙ふれて　をりしもかゝる月をみるかな

同四　初雪のふりしくかたに春にさき　をりしもおなし野への鶯

壬生二百下　玉椿やちよをかけて君か代の　をりしも春を待ちてこそ見め　西宮左大臣

続千載夏　夏草のしけみにはひる人もかな　をれぬひともやとらんみのゝ露　後京極摂政前太政大臣

玉葉冬　霜のうへにまたふりつもる雪の色　をれしにたかへ(?)かゝる白雪

壬生二百中　石そゝく滝の河波よるとても　をれをこそ見め山桜花　紀

玉葉秋下　光まさる君かめくみそ露ふかき　折えてもつきせぬ秋のみや人　中務

拾遺秋　うつろはん事たにをしき秋萩を　をれぬはかりもおける露哉　伊勢

玉葉冬　宮城野や枯葉の萩[illegible]　[illegible]　[illegible]門院[illegible]

新拾遺旅　さらぬだに霜むすぶよの山人の　[illegible]　中務

新後拾遺冬　難波[illegible]枯てもなびく[illegible]　[illegible]浦風[illegible]吹　従二位雅家

続古今恋一　思ひ[illegible]心乃[illegible]おもひれて　[illegible]　参議雅経

古今雑上　思ひきや心の中の[illegible]　[illegible]　三条乃町

玉葉秋上　ちれかゝる風の[illegible]　[illegible]萩の下露　[illegible]

風雅冬　吹風の[illegible]もなき[illegible]　[illegible]　[illegible]

後撰秋下　秋の月光さやけみもみぢ葉の　おつる影さへ見えわたるかな　貫之

月清集上　[illegible]月[illegible]　[illegible]

新古今冬下　[illegible]　[illegible]　源重之

玉葉恋四　秋も[illegible]風吹て　[illegible]　山口女王

金葉別　[illegible]の袖[illegible]　[illegible]　前大宰大弐長房朝臣

続後拾遺雑上　神無月[illegible]世中[illegible]　[illegible]　忠見

新続古今恋一　[illegible]て袖[illegible]　[illegible]　権中納言雅世

新葉恋四　[illegible]の[illegible]　[illegible]の淵と[illegible]　[illegible]俊忠

詞花恋上　[illegible]　[illegible]　安法法師

続古秋上　[illegible]吹風[illegible]　[illegible]　よみ人しらず

後撰雑二　[illegible]山[illegible]　[illegible]　[illegible]

拾遺恋下　[illegible]　[illegible]

同上　[illegible]　[illegible]　清[illegible]

後撰雑三　[illegible]　[illegible]　伏見院[illegible]

壬生二冬上　[illegible]山風[illegible]　[illegible]　よみ人しらず

風雅雑下　[illegible]山風[illegible]　[illegible]

古今秋下　秋の月山へさやかにてらせるは　おつるもみぢのかずをみよとか　[illegible]

山家集上　[illegible]　[illegible]

後拾遺春上　[illegible]梅の枝[illegible]　[illegible]淡雪　[illegible]天皇

新葉羇旅　吹風の[illegible]　[illegible]　後醍醐天皇御製

続拾遺春上　[illegible]　[illegible]　[illegible]内侍

新後拾遺冬　冬の[illegible]　[illegible]月影　贈従三位為子

新千載雑中　[illegible]難波の[illegible]　[illegible]　藤原[illegible]

新続古今恋二　[illegible]　[illegible]　[illegible]

続千載羇旅　浦[illegible]　[illegible]　前関白左大臣

壬生二恋中　[illegible]　[illegible]　[illegible]

新続古今恋　[illegible]　[illegible]　土御門内大臣

新拾遺釈教　[illegible]　[illegible]　[illegible]顕詮

大和物語　[illegible]　[illegible]

後拾遺集上　今はあれはたゞの秋[illegible]　あはれとや[illegible]　御製

新後拾遺下　袖にまく露の[illegible]　あはれ[illegible]　前中納言定家

新後拾遺雑上　思ひ入て我住山の[illegible]　あはれともいはまし[illegible]　賀茂成遠父

後拾遺雑上　待わびて[illegible]　あはれ[illegible]　[illegible]

風雅雑上　ながらへても老ぬる[illegible]　あはれ[illegible]　前大僧正忠源

新勅撰秋上　今はたゞ[illegible]　あはれ[illegible]秋萩の花　権中納言経親

後拾遺[illegible]　鳴すぎて[illegible]　あはれ[illegible]　従三位我

拾玉集二　月ぬしてまよふ心のゆくへ[illegible]　あはれ[illegible]

山家集下　[illegible]　あはれ[illegible]

拾玉集七　さびしくも[illegible]世の[illegible]　あはれ[illegible]

後拾遺秋下　[illegible]　あはれ[illegible]秋の月かげ　惟宗忠宗

後拾遺雑[illegible]　こゝろみに浦[illegible]　あはれ[illegible]　藤原基房

続後撰恋三　思ひかけ[illegible]　あはれ[illegible]　本院侍従

横笛　世をすつる[illegible]　あはれ[illegible]　時頼

新後撰[illegible]　冬の夜の[illegible]　あはれ[illegible]

新続古今[illegible]　夏衣[illegible]　あはれ[illegible]柱の下草　前中納言為秀

新後拾遺雑下　[illegible]雲井[illegible]　あはれ[illegible]　従三位為理

後拾遺[illegible]　我宿の雲井[illegible]　あはれ[illegible]　亀山院御製

拾遺[illegible]　[illegible]　あはれ[illegible]　知足院入道前太政大臣

新千載恋四　[illegible]　あはれ[illegible]の月　従二位為継

新後冬　[illegible]　あはれ[illegible]　参議家良

新続古今雑上　[illegible]　あはれ[illegible]　権中納言定家

新勅撰雑一　[illegible]秋をへて　あはれ[illegible]夜の月　皇太后宮大夫俊成女

新古今上　梅花あかぬ色香も[illegible]　あはれ[illegible]　前大納言為世

後拾遺[illegible]上　[illegible]　あはれ[illegible]　後村上院御製

新葉冬　花すゝき[illegible]　あはれ[illegible]　前大納言為氏

新後[illegible]　月[illegible]　あはれ[illegible]月　西行法師

続拾遺雑秋　行末も[illegible]世中[illegible]　あはれ[illegible]　前大納言為家

同秋下　秋[illegible]　あはれ[illegible]　従一位教良女

風雅雑中　[illegible]　あはれ[illegible]　藤原為教卿

続後撰[illegible]　[illegible]　あはれ[illegible]

続衣三　[illegible]　あはれ[illegible]

雅本　山[illegible]　あはれ[illegible]　雅

続撰恋四　[illegible]　あはれ[illegible]

拾遺雑下　[illegible]　あはれ[illegible]　藤原為相

新続古今雑上　[illegible]　あはれ[illegible]　後醍醐天皇御製

後拾遺恋三　いつはりと思ふものから今さらに　わすれがたみのちぎりなりけり　光俊朝臣
拾遺恋五下　わすれじとちぎりし人の[illegible]　わすれ風ふくみやこなるらん　前大僧正慈円
新古雑下　思ひねど世をそむかんといふ人の　わするばかりや我も成なん　藤原隆経朝臣
続拾遺恋上　恋しさの人のかつらぬ　わするはまたやかよふかな　前内大臣基
続後撰恋四　忘らるゝ身をば思はず　わすれてもなほおもかげぞ　入道前太政大臣
新後恋二　うきなからなほ恋しきぞ　わすれぬものはあはれなりけり　大納言為氏
新拾恋四　思ひいづる心ひとつのうきものを　わするゝもよしなしと思ふ　心覚法師
詞花恋上　忘れなむ今はと思ふ　わするらん人もこそあれ　中務卿宗尊親王
新後拾恋四　夢のうちに思ひ出てもとはぬかな　わするらんなさけもかなし　権中納言経高
新葉恋二　おもかげはうつりしもせぬ　わすれかねたる　右近大将公相
続後撰恋三　それをだにおもひしらぬか　わするなよ　贈従三位為子
新千恋四　をしからぬ命よりける　わすれずは世のふるごとを　能蓮法師
続千恋一　恋しさの絶えぬ命を　わするゝも世のつねなれば　刑部卿範兼
新古恋三　忘られん人をうらみじ　わするゝもわれにかはらぬ　枇杷皇太后宮
新千恋旅　なき世のなかは　わするとものをしらぬかな　同
新後拾　あひ見ての後の心　わすれそのもの思ふか　前中納言定家
玉葉恋五　わすれぬる命も　わすれて世をふるならば　待賢門院堀河
続拾恋二　いまはとてわかれしひとの　わすれずてよそにもおもふ

新後拾恋四　むかしにもおひならぬ月にては　わすれていまはまた[illegible]　後京極摂政
玉葉恋三　つれなさの人のこゝろをうらみても　わすれはてぬも思ふかな　従三位忠兼
続後拾秋下　露しげき花の上に　わすれずもおもふことぞ　前大納言為氏
風雅雑上　をしむべき春のこゝろの　わすれなむとてもなほ　賀茂雅久
新勅撰雑上　さらぬだにみし山の　わすれがたきは白雲　典侍因子
詞花雑上　かゝる山の雲かゝる　わするゝうさは月にまさる　大江嘉言
新千羇旅　いくとせのかげを　わすれじの友のあはれ　真昭法師
続後拾羇旅　おいてこそ月の　わすれなむ空をもかへ　権中納言公雄
新後秋上　涼しさは秋の夜　わすれぬ秋の夜の風　前参議雅有
長秋詠藻　世の中をそむきてみれば秋の月　わすれかねたる　前参議忠定
続後撰雑上　世の中をそむきてこれ秋の月　わするゝことをこそ　後嵯峨法師
千載秋　ゆふまぐれのきばのやまの雲　わするゝものを　後醍醐天皇御製
月清集上　はるゝ夜の影もひとつにやどる　わするとも月をみる白雲　洞院摂政左大臣
新葉羇旅　ながめてはかれも秋の　わするゝとも月をみるかな　了然上人
続後撰恋四　心こそ思ひしれたる　わするらんかりもかなし
新後拾冬　海よりもふかき思ひ　わすれぬ月のかげ
山家集　なにとなくおもひそめては　わするゝ物を
新後拾秋上　秋くれてうらぬる思ひ　わするゝ物をおもふらん　よみ人しらず

続拾遺羇旅　ふるさとの旅ねの夢ハさめなから　ねざめ月を袖にわかれし　権大納言實家

同旅　さなくともむすひかねたる草まくら　ねざめ月も朧にすまれ　後京極摂政前太政大臣

同雑下　たのみこそ取へきものを　ねざめ月ハ袖にしつき　寂空上人

玉葉雑四　うき時とおもひねてハおもひねに　ねざめ月ひとりなみだかな　前大僧正慈鎮

山家集上　なかなかにおもひしらるゝ袖のうへに　ねざめ雲さへもかゝるそ　西行法師

新千雑中　おもひやる子をおもふ露の一つに　ねざめ嵐吹秋の夕　藤原基俊

拾玉集六　あき乃夜ハ枕にひとり袖ぬれて　ねざめおもふ世のうさよ　平宣時朝臣

続千恋四　今はやかれにしきをもかなしさに　ねざめのこゝろそ　徽安門院

風雅恋上　ほのぼのと永き夜の月の光の　ねざめよそに雲のうき　前大納言為氏

新千雑上　我ならぬ人もあらはおきゐて　ねざめの時雨にかきくらし　道洪法師

新後拾雑秋　思ひかと思へハ秋の夜もやかて　ねざめの外に夜のわかれ世　祝部成茂

新後秋下　更くる夜にあはれもしらぬ嵐やさむき　ねざめの月をともにすむや　従義門院

新千恋一　ひとりぬる寝覚の窓の夜の月　ねざめの枕の庭の夜の雲　太上天皇

続後撰雑上　秋の夜のなかき思ひや夢の外　ねざめの袖の夜のうきなみ　平宣直

玉葉夜　わすれめや初雪の雲の空に　ねざめの後にさめぬる　新宣陽門院

新葉夜　一夜ハあらぬねさめにもまたきつゝ　ねざめ人もありや　前治部卿

新後夜　時鳥まちつる里の山ほとゝきすらん

拾遺恋下　おもひつゝいもねられぬ夜をそ　ねざめ雁の浦の波風

拾玉集七　秋の田の稲葉そよかて夜ふけゆく　あはれ涙ハうつみぬらん　源義氏朝臣

同一　住侘る山里ハさみしきおなし　あはれなく袖も哀なりけり　ちかき人々

続後拾雑　うらみつる松の風のねさめにて　ねざめはけしき嵐にそ吹　前右大臣家

続後撰秋下　なかき夜の更行まゝにさむしろに　ねざめなかき夜の月も涙　善祐法師母

続後撰恋二　いつはりの袖の海ハあはれと　ねざめつらき涙ハなく人　法眼源承

拾遺恋又　なく涙よりもかなしきおもかけの　ねざめなかみ月もなき　

続拾雑秋　うちむきてハいつる世の風の　ねざめかなしき夜をなかく

長秋詠藻下　草深き袖ハいつとなくすゑて　ねざめなみだによそめく　前大納言為家

続千恋又　うらむるも恋ぬる人のあはれそも　ねざめあはれさせくる　平教盛

後拾遺哀傷　うすき衣のうらみにしてまたれる　ねさめのかすか袖かな　三善保秀

新続古雑中　行水をせめてそ世のあはれにおもひ　ねさめ我かさそへる　前参議忠定

同恋下　冬のも香もねさめ露にきらりし　ねさめそれの秋の初月　前大納言忠信

続古雑上　老らくの家のあはれハかなしき　ねさめ山の月の影　興信法師

新後雑下　何となくうきよの人のねさめかな　ねさめいやおもひなき

壬生二百下　あすの夜の老のねさめによるも　ねさめ梅咲里の山の世

同中　吹おろす山の峯の嵐のさむけく　あはれも月の影

拾玉集六　まつともよかりと日吉をあはれ

続古恋又　いせの海のあまのまてかたのねさめ　ねさめてハ夜をあかしかね　衣笠前内大臣

新続古今恋五　待えても人の契ぞうかりける　なかむれはうみの山の端の時月　前左兵衛督教定

拾遺愚草上　秋乃夜のふけゆく月にあかさせて　なかむれはうき世の外も風の音　賀茂成基久

新拾雑中　うかれ行こゝろも稀ぬまゝに　なかむれはうき世も何よかゝりつ　藤原為家

拾玉集七　花乃香を枯野霜に残して　なかむれは山の入るまゝの月かな　土御門院御製

新後古恋上　梅か枝も雁鳴わたる夜ふくるまに　なかむれはのき端の空の夕せ　前中納言為兼

新後冬　山風にさそはれ冬の空ぞ晴れ行く　なかむれはあかぬ心の時雨かな　前僧正道性

後拾秋下　言ふ松の枝をぬらす露かな　なかむれはあまの小舟の秋の雲乃流まで　

新葉秋上　春風乃ひかりとかたみに氷室山　なかむれはくもり秋の夕風　よみ人しらず

壬生二集上　桐の葉もたちやおかうけむこそ　なかむれはあかぬ夕べの秋のたのむ　

山家集上　あきそらのこゝろひ一夜の風は　なかむれはあかず月の影もなし　前大納言為家

後拾秋上　銀河雲よそ見ゆ七夕の　なかむれは人のあはれ深きを　従三位為子

玉葉賀　今日もきさらき月日の光にそ　なかむれは人の心のすゝむ道　

山家集下　秋の夜もいかなる月のかけそ　おもへは空の月をみるかな　従二位家隆

玉葉雑一　恋ひきことを思ひかねて　なかむれは人の月日をたのみぬる　

幻

後拾恋　かきつめてみるもかひなきもの　なかむれは雲井の煙となりぬれ　小侍従

拾遺愚草上　今はこゝろもゝ深くしるへ　なかむれは山のはに入ぬる　小宮内卿源信

新葉夏　花ゆへは悲しうき世ぞおもふ　なかむれは山端にかゝる月　右近大将藤原長直

さえわたる空にほのかに月ぞすむ　なかむれは月にむかふ　

後拾雑秋　かくて秋の夜すがら庭のまがきを　なかむれは人のいなかなる空の月　よみ人しらず

続拾遺恋三　あはれとも人のとふべき月なれや　なかむれはきまゝのね今夜也　権僧正静快

後古冬　雅ぬるも浦の風の夜半に　なかむれは昔をとふは人ぞなき　順徳院御製

新後古秋上　世を秋の空にやかゝるらむ　なかむれはきのふもけふも　法印義賢

後千恋一　名にのみしられぬもの夜の月　なかむれはまたこと夜の月をそ思ふ　前大納言為家

新後拾雑上　住吉の浦にもかゝる月影に　なかむれは鶴鳴こゑそ　為冬朝臣

月清集下　さゝ浪や志賀の都のあれにし　なかむれは心もすみぬる　

新後古恋二　ふるき世の人にとはゞや　なかむれは浦の浪をとの恋　源家長朝臣

後古夏　まだきより月のつきそふ　なかむれは月こそかはれ　雅成親王

新千秋上　いとゞ寂しさまさる夕暮の　なかむれは我秋の色かな　前大納言實教

後千雑上　谷の戸のあくるを待つ嵐吹　なかむれはふくる夜の月　権中納言為藤

壬生二集上　子日する松の下草や残るらん　なかむれは二葉の松の色　

後千雑中　吹わたる嵐の風のひゞきの　なかむれはふるきの人あまのね　権少僧都範嶽

後拾雑秋　いくとせかあらぬ身を　なかむれは梅の花に秋のみち　前参議雅經

壬生二集下　まちわびて月も雪をも庭のしきみせ　なかむれはこの空の夜半の雲ぞ　

後古賀　かぎりなき君をぞいのる千世　なかむれはその昔の中の　源家長朝臣

後千雑下　花ぬまにねてうちかへしの　なかむれはことさらに我をしのべる　

拾遺愚草上　夜ぞふけて山井の水の音すみて　なかむれは木陰によするしづくは　殷富門院大輔

壬生二集中　立かへりみちあるみよをあふくかな　わかすむこゝろはまつよにそゆく　従二位家隆

風雅巻三　世の中にさらぬわかれのなからなむ　わかすむこゝろのやまはうき　よみ人志らず

古今巻一　忘れねときゝしにかなふ山さくら　わかすむ宿のはなのあるしか　藤原相如

風雅巻十　あはれまたなにのうき世にすみなれて　わかすむこゝろにつきぬなりけり　権大納言

総角　あはまきかたに契りをむすひつゝ　わかすむ心はまつのすゑか　同

新葉巻三　人もみなまたぬ月をやなかむらん　わかすむこゝろは月にゆくらん　権大納言具氏

拾遺巻三　こぬ人をまつのあらしの山ちかく　わかすむかたはそらのくもゐ　よみ人志らず

新葉巻二　ちりやらぬ花もかつちるやまかけに　わかすむかたにはるそくれぬる　同

玉葉巻四　荻の葉に風のおとつれそよくなり　わかすむやとのあきのゆふくれ　法性寺入道前関白太政大臣

続古今巻三　我ならぬ人もなかめむ秋の夜の　わかすむかたのあけかたの空　太宰帥親経

末摘花　たえぬ秋の月まつ里をしのひつゝ　わかみしくものうきよとも　同

玉葉雑三　ひとりやはみてぬ山路の月の影　わかすむかたにまたもかへらん　和泉式部

続千雑上　つれなさを我もかつしる袖のつゆ　わかすむかたのあはれをもしれ　従三位成実女

新後拾遺十　秋のよのさむしろにしく衣手に　わかすむかたの月をこそみれ　前大納言為家

詞花巻三　こぬ人をまちかねやまのよふことり　わかすむかたの空にこゑする　大皇大后宮

拾玉集六　からにしきたつたのかはのみなかみに　わかすむ宿のあきそかなしき　よみ人志らず

続撰巻六　思ひつゝまたいかにせむわか袖を　わかすむかたにまつそ見えける　同

同巻二　ひとりのみかりほにしくれふりしきて　わかすむかたにくもそかゝれる　源家長

新後雑中　年をへてこゝろはかりはおもへとも　わかすむかたのとをさかりけり　太上天皇

新千羇旅　さてもまた山ちの月のかけうつる　わかすむかたにまよふくもかな　前大納言為世

続千良経　人の世も我身ひとつのうき中に　わかすむ月やはれぬくもゐ　前参議雅有

壬生二集上　後の世のちきりはたのむ月も雅　わかすむこゝろやきみのうへ　同

拾玉集二　人をとふひとはかきりもしらて　わかすむかたはまつそくれける　寂蓮法師

続拾遺下　山桜ちるともけふはみよしのの　わかすむこゝろかきもとの花　入道内大臣

続千雑上　ふるさとのかはらぬものはしらくもの　わかすむかたにかゝる白雲　寂然法師

壬生二集上　なかむるもおなしこゝろのありあけの　わかすむ空も契初けれ　前大納言長雅

玉葉雑五　春霞たちにしよりもあはれなる　わかすむかたのくもまよふらむ　家隆卿

新葉巻四　いかにせん苦しきまでにおもひわひ　わかすむかたのきりの契を　常陸親王

玉葉旅　細霧をわけてきつゝも旅衣　わかすむかたはいつのはなと　平兼時

風雅巻四　思ひつゝ山のをのへのさくら花　わかすむかたのゆふつけ鳥　大僧正行尊

月清集上　おりふしの萩のつゆもこほれつゝ　わかすむやとのはなの夜の月

続千巻三　うつろふもかはらぬ色の花の川　わかすむあとはよもきふかき　源家長朝臣

拾遺巻十　都ひとそのこゝろをそしらねとも　わかすむかたにこゝろかよはす　従二位家隆

続拾遺　ひさかたのつきのひかりにさそはれて　わかすむかたに月のかけみる　権大納言実定

新千秋下　春秋のいつもかはらぬやまのはに　わかすむかたにさそふ秋風　後京極摂政

拾遺員外上　あくかれてすみこし山のみねのまつ　わかすむかたにすめるつきかけ

拾遺雑賀　松の根に出る泉の水なれは　おなしきものをたえしとそ思ふ　貫之
壬生二下　おもひやる心そともに鈴鹿山　おなしみやまにまよふらん
後古哀傷　何となく思ひし事も夢なれや　おなしゆかりの玉のを　参議好古
同雑下　神のますもりのこすゑに（？）　おなしむかしの秋風そふく　在原仲統朝臣
拾遺哀傷上　いにしへの世の人もおなし　おなしみな世の人も　
壬生二下　あやめ草ひくてもたゆくなかき根の　おなしみよりも
凡雅秋　ねかひても秋は変らぬ　おなし緑の松原　
後古　いかにせむ　おなしよの秋の涙を　藤大納言為氏
新千雑下　根にかへる花をとふ人　おなしみちにもまよふらん　大僧正道性
後拾秋　暮の春　おなしみちにも見ゆらん　藤大納言為家
新千冬　またきえぬ雪ぞまたれて　おなしみちにも道ある　法成寺入道前摂政太政大臣
金葉秋　九代まで二代かさねて河竹の　おなしみよにもあふかな　上東門院
新古恋一　つらきかな秋のしらつゆ　おなしみちにも　摂政家参河
拾玉集又　白雲の山にかかれる　おなしこゝろに心の月　権僧正永縁
同　霜むすふ籬の菊の秋をまて　おなしみやまの紅葉を　藤原義孝
後拾冬　氷の中にも光をとめて　おなしみ山の月もみゆ　俊成
金葉秋　水のうへにやとる月影　おなしみかけて秋の夜の月　大僧正道賢
　　残したるをかけてたになかれぬ　おなし水にもやとる月かな　春宮大夫公実

千載冬　雪風の音も浪の音さへかはる　おなしきのめきけは哀を　平康頼
拾玉集七　見る程もあるまてもなき　おなしみやこの月もみる
新拾遺　いにしへの人さへ猶もまたれ　おなしこゝろやすむらん　花山院御製
新千雑上　白雲のおりゐるやまの　おなしみやまの藤もなく　太宰大弐重家
後拾遺春上　山桜あかぬ心をいかにせむ　おなしこゝろに花を見て　前参議三位為家
新千冬　待つ人もあらぬ宿にもちるはなの　おなしみやこの空　惟明親王
後千冬　浦風にふかれて浪の　おなしみやまのしら雪　前大納言為氏
古今恋四　梅のはなに小松か枝を　おなしひとよにも　よみ人しらす
後拾恋四　今そしる小池の水に　おなしひとつのよもすから　津守国冬
玉葉春下　春をまつ心にたえぬ山さくら　おなしひとつのもとの　藤原為守
拾玉集四　わか海やあけなは月の　おなし光は秋の山の　伊勢大輔
新千冬　いにしへの　おなしひかりのあはれさ　源式部
同　かもし君よかゝりて　おなしひかりの　惟宗忠景
後千雑中　和哥の浦にも　おなしひかりの秋の月　太宰権帥為経
新後拾秋下　さ月のころ　おなしみのりの
月清集上　秋をしのふ人の心の　おなしひかりの
千載雑　あやしくも花の色　おなしひとよにも
山家集下　人ふるくもなく梅のえ　おなしひとよの　道命法師

金葉春　梅かえに風やふくらんはるのよは　おらぬ袖さへにほひぬるかな　太宰大弐長房

新続古雑　あやなくも風のぬすめる梅か香に　おらぬ袖さへうたかはれけり　賀茂重保

続千雑上　吉野山みねの桜やさきぬらん　おもかけならぬ花の白雲　源重泰

新勅秋下　かきほなる萩の花さく秋の野に　おりもおかてそ袖ぬれにける　天暦御製

続後撰春　波かくる井手の山吹ちりぬらし　おりもおかれぬ河つらなる　土御門院御製

古今春上　春ことになかるる川を花とみて　おられぬ水に袖やぬれなん　伊勢

新千秋下　紅葉ちるゐせきの水に月さえて　おられぬ水にかけもさやけき　三条入道左大臣

拾遺　山河にしからみかけて見つる哉　おられぬ水も波のたちけり

同上　あしひきの山の岩かねふむ人も　おられぬ水もけふやわたらん

拾玉集一　うつろへる色をも花とおもふらん　おりしもやまた春をまつらん

拾遺秋　枝なからみてやかへらん紅葉はは　おりてはかりそ手にもたまらぬ　源兼光

後拾遺秋上　よそにてはおもひもそめしをみなへし　おりて見つるも人そとかめん　源道済

金葉春　ちる花の色をみせはや山さくら　おりてかさしの花とこそせめ　僧正行尊

続衣四　ちりぬとも花のあたりのおもかけに　おりてたにみよ春の木のもと

壬生二品集　おもふにはまた下露もおきやせん　おりてはたをる萩かえの花

後拾遺春下　山吹のちるをおしむといひてにほふ　おりてもしほのかはそかはり　大僧正覚源

続衣四　みちのくの人のあふせをまちかねて　おりてもしほにぬるる袂か

夕顔　さく花はよしやいつれと問てまし　おりてすきにし秋の野の萩

月清集上　秋のよはまつ見ることのおほかるに　まつはあたなる風のおとかな　式部卿親王

玉葉雑一　山かけのまつのしたはに吹く風は　松の下にはよもきふかくそ　権中納言為兼

新後拾春下　松のはもみとりかはらぬ春の色に　松のしたまをもるる月かけ　摂政太政大臣

新古秋下　さよふけてまつの嵐をききてこそ　まつのよかぜはかなしかりけれ　右大臣家陸奥

後拾秋下　あらしふくまつのこすゑのしらつゆは　まつのはかりに秋の夜の月　右大臣

新千春上　高砂のをのへの松にふくかせの　まつそふるさとの雲ものこりなん　能因法師

古今雑上　かくしつつ世をやつくさん高砂の　まつのなきさに松もゆかしき　よみ人しらす

後古雑下　つらきにも我かみもつらき秋の夜の　まつのまにまにおもかけの月　今上御製

拾遺雑恋　我のみやつらきめを見るなかなかに　まつのまとろむ松もことし　六条内大臣

後古冬　雁さえてやまのかみよりふる雪の　まつのこすゑにつもるしら雪　権中納言長方

後千春下　白雲のたなびく山の花さかり　まつのまさきの桜なりけん

新勅恋下　春風のふきまよはせる松のはに　まつのまにまにのこる白雲　船頼

玉葉秋上　我宿の秋の草はのしけき時　まつのはにまよふむしのなく声　法眼兼誉

新千秋下　松風のたかくきこゆる秋の夜は　まつのしたつゆ月のかけ　藤原信氏

続千恋一　もろともにまつへき人の山の　まつのまにまにまつそうかりし　従二位為子

風雅旅　ちとせふる我かよはひも高砂の　まつのみとりに秋の夕暮　左大弁時長

新葉秋上　松風のおとにはたてて吹かせの　まつのしたはに秋の夕暮

千載冬　たえまなくしつかにふれる秋山に　まつのはとむる風のしら波　藤原良清

玉葉冬　見渡せはゆふゐる雲のかゝるより　たかさごのをのへにさむき雪のしら山　賀茂氏久

壬生二百上　山もとにあきもまだみぬたかさごの　をのへの紅葉に山風ぞふく

続拾遺下　吉野山つゞく桜のさきぬらん　をのへの霞色ぞうつろふ　前大納言為氏

新千載下　たかさごの松のみどりはつねにして　をのへのはなの色ぞうつろふ　前大納言為家

月清集上　たかさごの松よりかよふ風のまに　をのへのかねのおとぞきこゆる

続古秋下　月影は秋のねざめにたかさごの　をのへの松の色やそふらん　平兼盛

新続古秋上　秋風は枝ともみえぬたかさごの　をのへの秋のもしほ草かも　中納言家持

月清集上　松は猶秋をまちてたかさごの　をのへの鹿もなきはじむらん

拾玉集二　俺人の心のうちをよそにして　をのへのかねぞ松風のおと

同四　いつまでも年のをはりをしらぬかな　をのへのまつはむかしのまゝに

壬生二百上　関人の物思ひの秋はふけにけり　をのへの鐘はあはれなりけり

新続古雑中　思ひいる山のをちかたこえゆかん　をのへのかねに月ぞかたぶく　如願法師

拾玉集二　草枕あらしの枝に露ちりて　をのへの月のかげぞさやけき

新古恋二　身をもつゝみこそすれたかさごの　をのへのさくら色にいでけり　定家朝臣

続千載下　花の色は松よりもなほたかさごの　をのへのかねの声ぞかすめる　内大臣

拾玉集二　いかばかりきかばやをのへふく風の　をのへの秋の色をしるらん

新葉秋上　荻の葉にかよふたかさごの　をのへの鹿の声ぞきこゆる　後村上院御製

風雅雑下　たかさごの松のみどりもかはらねば　をのへの花ぞ色にいでける　皇太后宮大夫俊成女

新古春下　山桜枝のむしろにみえぬまで　をのへのさくら花ぞちりける　大納言経信

続千秋上　出やらぬ雲にかくれて山高み　をのへの月に雲風ぞふく　前関白太政大臣

新古秋下　山風に鹿の音たかくきこゆなり　をのへの月にさよふけにけり　入道左大臣

新続古秋上　つきせぬ末の秋をかぞへつゝ　をのへの月のかげをまつかな　津守国冬

壬生二百中　初かりもいまこそわたれたかさごの　をのへの雲にさをしかも鳴く

続古哀　松風もはげしくなりぬたかさごの　をのへの雲もよそのみねまで　中務卿親王

後拾遺秋上　鹿の音に秋をしりけるたかさごの　をのへの松のまつとはなしに　宗

続後撰秋　立そひてもみぢするたかさごの　をのへの松の色ぞかはらぬ　祝部成茂

続千秋下　おろし風吹くもみえぬたかさごの　をのへのまつにかかる白雲　隆信朝臣

同秋上　まよひつゝ山をへてたかさごの　をのへのまつに月をみるかな　入道前太政大臣

新古秋上　吹風のたえずもみえぬたかさごの　をのへの松に秋はきにけり　藤原秀能

拾玉集七　秋かぜにそよぎしたかさごの　をのへの松はすゞしき木枯

壬生二百上　ひさしくて枯の雲にくもるなり　をのへの松は雪のうへの風

続古冬　月影のさゆるとともにつもりけり　をのへのまつの雪の下風　正三位知家

続拾雑秋　秋はててまたふりくるもしらぬかな　をのへの時雨ふる鐘の声　澄覚法親王

壬生二百中　門田吹く風の音よりもまさりぬる　をのへの松の末の秋風

後拾遺雑三　我のみと思ひしかどもたかさごの　をのへのまつもまたもちけり　藤原義定

続撰恋六　さゝがにのあはれもかはるたかさごの　をのへのまつをきくも悲しき　源兼明朝臣

玉葉雑二　檜原より出る山の月よさむなり　をのへのそらに鐘の一こゑ　入道二品親王覚性
新葉秋下　高砂の松の木の間の紅葉　をのへのあらしや松さむしぬらん　前光明院内大臣
続千秋上　峰遠の数をはかれる高砂の　をのへのあらしいかにしぬらん　万秋門院
新勅恋上　消ゆるとも雲とはならん高砂の　をのへのさくらちらぬかぎりは　前関白
続千恋下　吉野川花の若草かけて高砂の　をのへのさくら今やちるらん　前内大臣
新後恋下　山風もふけて梅をはらふさくらの　をのへのさくら今さかりなり　山階入道左大臣
拾遺愚草　高砂のまつとは人を頼まねど　をのへの櫻今さかりかせ
後撰恋中　山守はいはゞいはなん高砂の　をのへのさくらおりてかざゝん　素性法師
続拾恋上　たえて見む山の手向の高砂の　をのへのさくら雲も待ちけり　参議雅経
壬生二百中　山もとも花にうつろふ高砂の　をのへの櫻苗しろにせよ
新拾恋上　さのみやは雲の絶まに高砂の　をのへのさくらにほひぬらん　俊恵法師
続拾夏恋　一枝も我やは折りて帰らまし　をのへのさくら散らばちるとも　光俊朝臣
新勅恋下　高砂の春の空にそ消えなまし　をのへの雲とはなれぬ身ぞ　藤原範宗
拾玉集四　さても秋月の夜はさそ　をのへの雪ぞ鹿や鳴らん
新続古秋上　見てもなほ雉子のなくなる高砂の　をのへの梢は月ぞさやけき　藤原家隆
新古秋上　萩が花真袖にかけて高砂の　をのへのこずゑにかゝる露かな　顕昭法師
月清集上　かすみ行く霞も見え初めて　をのへのさくら乃花乃曙
続後撰春下　ちりまがふ花やあまりの高砂の　をのへのさくらの花の夕暮　従三位行能

新拾秋下　月影のさびしくもあるか高砂の　をのへのかねの明方の空　真昭法師
新勅秋上　夕暮はなほぞすゞしき高砂の　をのへのさやの秋の初風　鎌倉右大臣
続千冬　野も山もひとつにかすむ高砂の　をのへの空の雪の明ぼの　源守国
古今秋上　秋萩の花咲にけり高砂の　をのへの鹿は今や鳴らん　藤原敏行朝臣
拾遺秋　秋風のうち吹ごとに高砂の　をのへの鹿の鳴ぬ日ぞなき　よみ人しらず
拾玉集三　哀いかに嵐ふくらん松の声　をのへの鐘の数まさるらん
拾遺愚草上　ちかひけむ峰ぬる月の高砂の　をのへの梢霞ぞわたる
続拾遺秋上　秋はなほ露ふかき中の高砂の　をのへの松の音よりも　能因法師
同　露ゆけき霧の立のぼるらむ　をのへの松にもしのび寄る　源経朝朝臣
同雑上　高砂のたよりあらばよ高砂の　をのへのたえて秋の夕暮　源相方朝臣
拾遺冬　高砂の松にすむ鶴冬来れば　をのへの霜や置まさるらん　もとすけ
続撰恋五　つれなき人の心もしるべなる　をのへの松の色も変らず　よみ人しらず
玉葉旅　おきてもなほ松寒き秋の　をくらの山の白川の里　清原[illegible]
新拾羇旅　いかにまた吹く嵐の白雲の　をくらの山の雪ふかき里　前参議為秀
古今恋一　つれもなき人をこふとて山びこの　をくらのやまのかひもなき哉　よみ人しらず
続撰恋一　夕暮は松もかはらず高砂の　をくらのやまに鹿ぞなくなる　藤原かねみ
新勅恋五　野辺のちりはてゝ高砂の松の　をくらの山も月ぞさやけき　前大僧正慈鎮
玉葉雑二　ゆけどもまださへかはらぬ松の枝　をくらの山もひくくなりゆく　前大納言家雅

拾玉集三　つれなくてけふもくれぬる櫻かな　わかるゝ谷の山かけの庵

同一　いかにせむそのしるしなき身のつきや　わかるゝ谷もうき世なりけり

同七　花をおりてしるへにそふる吉野山　わけいる岩ねの苔をまくらに

新拾秋下　きえ残る雪をしるへにかつらき山　わけのほる峯に有明の月　道深

拾玉集三　みよしのゝ山の白雲なかめつゝ　わくる桜や雲にまかふらん

風雅冬　暮の雪ぬる庵のひかりの雪おちて　わくらはに人のゆくへのしと　院少将

拾玉集四　かへるさの道もしぬるかなゆく　わく山もとの庵そかなしき

新拾秋下　露むすふ袖のまゝにそなれぬるは　わくてなれぬる人なれはかり　従二位為信

月清集上　あはれとや袖のやとかるらむ白雲の　わくてなれ稲葉そよく月にまよ

千載羇旅　さためなくわかゆく道のあはれをは　わくやたつ(?)つけよ風のおとすれ　平康頼

無　おもひあまり昔の袖の秋の風　わくやまそむけつるそさへ

新葉哀傷　つゆの袖ぬれてしのひてなかめつゝ　わくやまさる見る人もなき　読人不知

撰　ありてなき命も待こよ世の世は　わくやまを(?)わかれしあはれ

続拾雑下　秋もなく一枝の花とみしかとも　わくやのつきぬを待てふき　従二位行家

拾遺哀傷　たふりやられぬ昔の旅衣　あはれつきぬ昔の花の宿

続拾雑下　うき世ねの宿もうとく成まり　わくやのつきぬ昔の宿　源親長

新葉雑下　衰てそなれぬ袂もかへりみる　わくやのすゑのうきめかな　左近大将実親

壬生二条上　なかなかに年を忘れは(?)ける　あはれわかれてうきねの夢

新後雑中　つらかりし人の契りのつれなさに　わかの浦の人あはれの露　丹波長有朝臣

新千哀傷　あはれとも心にしらぬ霊まても　わかのうらにも人の世語　後京極院大納言

玉葉哀傷　人のよのむなしき名のみ世にのこる　わかやまくもゐをまとはれ　藤原親子

撰　遠き代の跡に絶せぬ道なれは　わかやのわかやとこの一かたに

新千雑中　七十の霜の浦まてあひにける　わかやの浦わにあとはのこれ　権大納言実継

玉葉雑五　その跡かけてかよふ(?)道をしのひ　わかやのわかのうらに(?)こゝろ　選子内親王

山家集上　くる春に待れしそれに過し月　わかよとへつきせぬ人のためしに

玉葉哀傷　なかれてき(?)残るあはれのかたみに　わかやとへつゝみせましものを　女御殿兼子

長秋詠藻　いつきたし(?)よせくる海のかたみ　わかまへ人なつかしき白雲

拾玉集三　四の海まてかはらて住吉の　わかまへの人あはれとそしる

続拾遺秋上　ありまたに秋もめくみあへる　わかなほよそにみえつゝの月の影　良暹法師

同雑二　涼みまて(?)一葉の木の葉の　わかなちれる(?)をきくかな　済範

壬生二条上　ありしみなそこのしるへ　あかなれぬ袖の露はらひ(?)かね

大和物語　昔の形見はかはりてきぬ　わかなみたのみ秋にまさる

拾遺雑上　年をへてこゝのつ(?)にすむ　おもかぬるあらましの月　よみ人しらす

後拾遺雑四　うきにのみ人の心のみえつれは　わかゆくこゝろのきはの影　六条右大臣

無　またかへりひとしめもまた人の心　わかゆくあはれ(?)にかへりぬれ

壬生二条下　いつかまた人よせのうきことの葉　わかゆくみちのうきも(?)つる人

玉葉夏　志らすきもつるゝ涼しき清水哉　おかのこゝろはまたたえせし　和泉式部

詞花雑上　あるかなき山のはかすみ　たかまのをのへにかゝる白雲　源正三位頼政

新古秋上　露むすふ草をとれる稲葉の　たかまのはらはまたなかり　大納言経信

後拾雑　数ならぬ身は成行をなけかれ　たかまのはらにたつかへるかも　大江匡房

拾玉集六　あさ霞たなひく山のあけほの　たかまの山の峯の松風　

後撰恋六　ちらぬまの花と見てこそ　たかまの山にわかれてきつる　藤原顕臣

後撰冬　たかまれる雪もふりしかなしくも　たかまのやまにかきくもりつゝ　よみ人しらす

拾遺哀草中　志らさきの梅の花の夜の宿　たかまの山のうへの秋風　

拾玉集四　清き秋の月はいつくもたえせし　たかすむや雲のうへの月かな　後京極摂政太政大臣

後拾雑　さえわたる空の稲妻吹風の　たかさこの山のねのうつりかな　公経右大臣

新葉雑下　いつもかくてもみちや吹ける風の　たかさごの世にのこるあはれ　後嵯峨院宸翰

新古恋下　吹風のこゝろもみえしかなし　たかさごの世をこそ思ふ　前中納言定家

後古賀　君をいのるまつのかけにて　たかさこの尾上の松　或少将

後拾遺賀　うきよりもうきを見る山のおく　たかさこのまつにそ今日　左京大夫顕輔

詞花雑下　つゆしけき山のしたくさ　たかさこのまつをあはれと　後鳥羽院御製

新葉雑上　秋の夜のあけかたの月　たかさこのまつのたかね　皇太后宮大夫俊成

新古恋　秋ふかき山田のかりほの　たかさこのまつの下かけ　

後古雑中　吹風ものこるかなしきこゝろ　たかさこの尾上のまつをはな　小野篁

金葉賀　松風の雄琴のさとにかよふなる　たかまのはらにかゝる白雲　藤原敦光朝臣

新拾秋上　久堅の月の光も雲のうへに　たかまのはらにすめる月かな　権大納言為世

新古雑中　ちとせふる松にかゝれる　たかまの山のむかしをそ思ふ　後鳥羽院御製

長秋詠藻中　うちよするみなとの山の　たかさこの松の世をしる　

山家集下　錦をやしくのこしつゝ　おさめて秋は錦をたちきる　

玉葉秋下　秋の夜のさやけき影を　たかさこのあきの月　院新宰相

月清集下　波のよする音のみたかし　たかさこのかけに見る　後京極摂政太政大臣

新続拾雑上　朝霧の立そめにけり　たかさこの尾上の松に　前中納言基成

新葉雑中　なかめつる庭の浦の　たかさこのまつのかけ　

風雅雑中　うらやましの海の波の　たかさこの松によする　

壬生二百上　のとかなる海のさゝ波　たかさこのまつの浦　

長秋詠藻中　あけかたの空の　たかさこのまつのかけ　

拾玉集一　あかつきの秋のそらの　たかさこのまつのあらし　

月清集上　今はとてなみの浦の梶をとりて　たかさこの尾上の風　寂蓮法師

新後拾雑中　ちかくなる風のまくらに　たかさこの海士のすむ　

山家集下　いそのまつの浪のうへに　たかさこのうらのつりふね　

拾玉集六　いかなる人のあはれの　たかさこの浦の秋風　

後拾秋上　露しけきかたをのかの　たかさこのあきのゆふくれ　能因法師

後撰恋四　[illegible]　なき[illegible]　[illegible]
新続古恋四　[illegible]　なき[illegible]　平宗宣朝臣
後拾遺恋三　[illegible]　なき[illegible]　中宮
続千恋三　[illegible]　なき[illegible]　後嵯峨院[illegible]
新続古恋三　[illegible]　なき[illegible]　正三位知家
新後撰恋三　[illegible]　なき[illegible]　平盛房
新続古恋三　[illegible]　なき[illegible]の月影　前大納言忠嗣
玉葉恋二　[illegible]　なき[illegible]　皇太后宮大夫俊成
新勅恋三　[illegible]　なき[illegible]　西行法師
後撰雑一　[illegible]　なき[illegible]　よみ人しらず
新拾恋二　[illegible]　なき[illegible]　権中納言[illegible]
新千雑上　[illegible]　なき[illegible]の初[illegible]　津守国冬
壬生二集中　月待と[illegible]　なき[illegible]浮雲
拾玉集六　[illegible]　なき[illegible]
続後拾羇旅　[illegible]　なき[illegible]　民部卿為藤
新後拾羇旅　[illegible]　なき[illegible]　前大僧正道玄
玉葉秋下　雲[illegible]　なき[illegible]　関白右大臣
同雑二　[illegible]　なき[illegible]　[illegible]

拾遺別　[illegible]草葉[illegible]　なき[illegible]　貫之
千載秋下　[illegible]　なき[illegible]白菊[illegible]　藤原基俊
拾玉集七　是日如[illegible]　なき[illegible]秋[illegible]夕
新古恋三　[illegible]今も[illegible]　なき[illegible]　謙徳公
続後撰恋一　[illegible]　なき[illegible]　祝部成茂
新拾秋下　[illegible]月[illegible]　なき[illegible]衣[illegible]　中園入道前太政大臣
古今雑下　[illegible]　なき[illegible]　よみ人しらず
月清集上　[illegible]　なき[illegible]
新勅雑一　[illegible]　なき[illegible]　権少僧都良仙
続拾秋上　[illegible]　なき[illegible]　修理大夫顕季
千載秋上　[illegible]　なき[illegible]　侍従乃内侍
玉葉秋上　[illegible]　なき[illegible]　従三位[illegible]
新後拾秋上　[illegible]　なき[illegible]秋風[illegible]　等持院贈左大臣
後撰恋四　秋風の[illegible]　萩の[illegible]　中務
続古秋上　秋風[illegible]　なき[illegible]　従二位家隆
新勅秋上　今[illegible]秋の[illegible]　なき[illegible]　二条院讃岐
風雅秋上　[illegible]　なき[illegible]秋の[illegible]　正三位経教
拾遺恋五　[illegible]　なき[illegible]秋の夕風

新続古雑上 思ふことなき人さへも袖の哀に をぎのはみだる秋の夕風 西行法師
山家集上 あはれいかに哀も風もひとつにて をぎふきわたる秋のかなしさ
玉葉冬 霜枯の草のはらより吹風の をぎのはかれてゆくうへの ゆふくれ 殷富門院大輔
新古秋上 あはれともたれか思はんゆふくれに をぎのうは葉に風そよぐなり 大納言経宗
後拾遺秋上 はかなくもおもひけるかなうき世にも をぎのうはゝに風ぞ吹なる 三条小右近
拾玉集四 夕月の月のまどの月の風や をぎの上葉の吹すさぶらん
同 いつも吹風にも風も秋はなどて をぎの葉よりぞ秋やしるらん
同七 風の音のをちの初めゝ今日まで をぎのうへにはむかしながらの
新続古秋上 ゆふ風のゝ秋のおとをつれて をぎのうはばにそよぎつゝ 是心院入道前関白太政大臣
新勅恋四 わすれじとかねて契りし秋風に をぎのしたばとをしるきなりけん 俊恵法師
千載雑上 まねくとも秋をおもはん宮の風 をぎの葉ゝの袂もあやしき 紀康宗
新続古秋上 秋はたゞ物思へとや吹つらん をぎのはゝ露けきものを 花山院御製
新古秋上 秋風のやゝはださむく吹なへに をぎのうは葉の音ぞかなしき 藤原基俊
新拾秋上 ひとり居て思ふ宿に秋来ぬと をぎの葉ゝの葉風もまたすゝしき 基俊
新勅秋上 おとづれて今はた吹ぬ我やどに をぎのうはゝに秋の風 右衛門督為教
拾遺愚草上 秋はなほ夕のあはれ我ゆゑと をぎのうはゝの風のふくらん
新古秋上 秋はたゞ物をこそ思へ露かゝる をぎのうへ吹風のけしき 源重之女
風雅秋上 なかなかにありしにまさる秋風の をぎの葉わたる秋のゆふくれ 伏見院御製

続後撰羇旅 舟泊てゝ残るかたみの浦や をぎ吹く浦に浪のよるころ 鎌倉右大臣
狭衣三 いつまでかよそに風のみ思ふらん をぎの葉に露のみおくの草葉に
拾遺物名 かずさへも秋にそむけてあはれなん をぎ吹く秋にあはぬ物ゆゑ すけみ
新千冬 霜ぬの月影さむきなかなかに をぎの葉に吹く嵐の音ぞ 俊恵法師
玉葉雑三 彼のうへは露の宿りてなつかしき をぎのはに吹く秋の夕暮 従三位為子
新勅冬 なにかまたもれてなる秋まで寝ざめする をぎの葉ずゑにまじる夜の声 権中納言国信
続拾雑二 まだきにて浪さへをきて立つ秋に をぎ吹く風の音まさるらん よみ人しらず
山家集下 いつまでも思ひの寝ざめのあはれなる をぎ吹く風は淋しかりけり
玉葉雑一 夕まぐれ野ゝおもしろくしげき野に をぎ吹く風に誰かまたなん 前参議実教女
新千秋上 おもひやる今の秋の夕ぐれに をぎ吹く風に音ぞしらるゝ 延政門院新大納言
続古秋上 秋の夜の月の霜おく袖の上に をぎ吹く風の音を聞くらん 女御徽子女王
後拾遺秋上 さりともと思ひしよりも身にしみて をぎ吹く風の音ぞかなしき 安法法師
新古恋四 我背子を今やとうかがひ住むよに をぎ吹く風にそよぎつゝ 俊恵法師
千載秋上 秋はたゞ寝ぬ夜も長き夜もすがら をぎ吹く風の夢をさますも 寂然法師
新続古秋上 夜をさむみかはりゆく秋の風の音に をぎ吹く風の音ぞかはれる 前大僧正良覚
拾玉集二 秋ちかき花橘のかほりむ をぎ吹く秋を待つ宿りかな
新葉雑下 おもひやる月もつらさや梓弓 をぎ吹く風の音ぞまされる 中務卿宗良親王
古今恋二 てる月をよひまちつゝも弓張の をぎふくかぜのおときけばかなし 貫之

後拾遺恋一　難波なるみをつくしても[illegible]　わきふりあけぬることをえ　赤染衛門

山家集下　我なれや風をわづらふ[illegible]の　わきふり[illegible]心あまくて

同　いとふ身を[illegible]　わきてふる[illegible]なき[illegible]

風雅雑上　与謝の海に[illegible]　わきてらく[illegible]　権中納言長方

後拾遺　都出て[illegible]月みれば　わきてそのいろをねぬ人[illegible]　凡河内躬恒

後拾遺　[illegible]月影を　わきてそのいろをねぬ人そ[illegible]　伊勢

風雅雑下　[illegible]　わきてそ[illegible]　前大僧正慈円

新勅撰恋四　[illegible]　わきてかむつ[illegible]　和泉式部

後拾遺恋三　[illegible]　わきてはらふ袖[illegible]　達智門院

古今恋三　[illegible]　わきてうけれし暁の[illegible]　よみ人しらず

後撰恋四　[illegible]　わきてそのひきわかれ[illegible]や　貫之

拾遺恋二　[illegible]　わきてこのひきわかれや　同

新勅撰恋三　[illegible]　わきてなか[illegible]　中宮内侍

後拾遺恋三　[illegible]　わきてとなり[illegible]　藤原忠房

新拾遺恋三　[illegible]　わきてとなりあまのたく[illegible]　前大納言為家

拾遺恋五上　[illegible]　わきてそ[illegible]

同　[illegible]　わきてそ[illegible]

新古今恋三　[illegible]　わきてのみちそ[illegible]　延喜御製

拾遺恋草上　冬の夜はあまたの[illegible]　わきてそやかん秋の白露　よみ人しらず

拾遺哀傷　うつゝともおもひ[illegible]　わきてさへつゆまがふらむ　俊恵法師

新古今恋三　[illegible]君と[illegible]　わきてきつゝ人の[illegible]　よみ人しらず

古今離別　かつ越えて[illegible]　わきてしのぶ[illegible]　同

後撰恋二　我こそや君もこふらん[illegible]　わきてそもねても[illegible]　権中納言国信

新勅撰雑三　君こふと[illegible]雲のゆくへ　わきてそもねてもねてぬ　後京極摂政

後拾遺恋三　なかぬ鴫の[illegible]　わきてわたつみ[illegible]や　中務卿具平親王

新勅撰羈旅　いつしかの秋[illegible]　わきてあひつゝ袖の[illegible]　藤原範兼

後撰恋二　[illegible]袖もしほる[illegible]　わきてあかぬの[illegible]

拾遺恋草下　[illegible]人[illegible]　わきてあかずものむすぶ[illegible]

月清集上　暁の風[illegible]雲[illegible]　わきてかり袖のさ[illegible]

拾遺恋草上　[illegible]人の[illegible]　わきてもあひ[illegible]

山家集上　今よりみ[illegible]霧の[illegible]　わきてもあくまて[illegible]　よみ人しらず

新勅撰恋下　[illegible]　わきてとなく[illegible]

新古今恋三　今はまつ[illegible]　わきとおりやま[illegible]　後光厳院[illegible]

後拾遺雑中　[illegible]　わきてのくも[illegible]　俊恵法師

新後撰雑上　[illegible]　わきてまの[illegible]　小侍従

新葉恋二　[illegible]　わきてのまの[illegible]我命[illegible]　大中臣[illegible]

続千雑中 後の世をとはれむことも思はてや わするなかれとおもはむ哉 前関白左大臣
新後拾秋上 秋風にふく袖の関もりも わすれぬまて月をみるかな 信実朝臣
新葉雑下 世をうしとつくす涙の情なれは わすれぬみをもおしきものかは 前大納言宗房
続後撰雑中 何事も思ひとりつゝすてはてゝ わすれぬ身のよそにうきかな 仁和寺二品親王守覚
新続古雑上 山のはにかゝれる月とともになく わすれぬ道に涙かな 源有房
新後雑上 いまはもみちの花をさかせて わすれぬ身のあはれなる 澄覚法親王
玉葉恋三 日かすへて思ひのこゝろ今はたゝ わすれぬしもあはれなり 従三位親子
新千恋 涙のみ雲井の月はよそにて わすれむとすれはなをそまかせぬ 花園院御製
新続古雑上 何かせんはてしなくうき身の年の暮 わすれし人のまちし身なれは 前大納言秀親
続拾遺恋 色も香も心のうちにおもふ身を わすれよとてや花の都人 前権僧正宗性
新後拾遺恋下 年もへて花よりこゝろさきたつか わすれぬ人の涙のおもかけ 中納言定家
玉葉恋下 花さかぬ身のことはりをなかめつゝ わすれぬ涙もまさるらん 大中臣能基朝臣
拾玉集六 こゝろなくもみちはちりて残るらん わすれぬ涙はなかくそよ
拾遺恋上 涙にかはるけしきの氷にてぬれし わすれぬ年ころにまさるらん
新後拾雑恋 思ひには色もそめぬこゝろかな わすれてみるの花の都人 超空上人
拾遺秋 いつかはと人の言葉のはなやかに わするゝひまの日数へぬらむ 恵慶法師
続千恋下 あはれとも思はてうきまくら わすれむほとの身とはおもはん 中納言朝忠
続古雑上 わすれ草みにおふるものとしりぬれは わすれて思ふ花を見るらん 伊勢
千載雑中 末のつゆ行末もあらぬ世なりけれ わすれむとおもひみぬへきかな 藤原定家
拾玉集四 夜もすから松風きゝて月のよを わすれむとおもひなからもこゝろの 正三位家隆
新勅冬 つらからぬ袖のうへのしくれかな わすれむとするに年のくれゆく 後鳥羽院御製
玉葉雑四 むかしおもふこゝろのうちの秋を わすれむとするもおもひなきかな 遊義門院御製
拾玉集六 さすかなり老てうき身の月を見て わすれむとする人のわかれか
続拾遺雑 こゝろにも君をそつくす道もなし わすれむと思ふ心もなほまさりぬ 二条太皇太后宮大弐
続後撰秋上 春はまた花にうつるゝ夜の月 わすれなるらむ水の流れに 後鳥羽院御製
拾玉集一 あはれなる秋の夕くれそのかみを わすれむ思ひのほかにもなれ
同三 今はわれ山のおくにて月をみよ わすれむとする思ひのほかに
続古大哉 うらむるな月と花とに思ひきて わすれむとおもひしものを 後京極摂政前太政大臣
風雅雑上 埋木となりはてぬるを山さくら わすれむとおもひてもなほ 中務卿親王
山家集上 世をすつる身はならひてよしの山 わすれむはなの思ひなりけり 西行
新千恋下 末のつゆおきやのこれる山桜 わすれむとおもひしことのやみもせて 前大納言為世
風雅雑上 春の夜の夢のまにまにさくら花 わすれむとおもふにまかせて 中務
新後拾恋下 萩の花こき紫の色をみて わすれむとてもかはらぬそ 清原元輔
月清集上 恨むともよし月と花とを思ひても わすれむ物かはおもひはてき 藤原良経
新拾秋下 あはれとも人をわすれぬ秋の夜は わすれむとおもふにまかせて 刑部卿範兼
拾遺別 わすれなん人のわかれになくなくも わすれむとおもふに涙そ落る 藤原清正

千載 春下 暮て行かたみのつくもあまた 打 むつきせさらん 大納言隆季
新拾 秋下 年ことにきくねぬ秋と知ぬらん 打 むしのこゑのきこえぬ 讃岐
千載 春下 いつくとも花の行末の 打 むつましきかたみの 藤原経家朝臣
同 雑中 ちりつもる言の葉しけき 打 むつましきこゝろの 権中納言通親
金葉 春 春毎に花のさかりは 打 むかしもかくや 長實母
山家集 上 月のすむあさちか 打 むかしおもふ 小侍従
玉葉 恋三 打 世にあるを 打 むもれ木の 院御製
千生 二 下上 我秋も哀れなる 打 むしのね 順徳院御製
拾玉集 六 鶴なく海山の 打 むらさめの 大僧正慈助
万葉 恋 見るまゝに 打 やまかけ
新続古 春下 花もちる 打 まぬか 崇徳院御製
壬生 二 下上 見てもなを 打 まれぬ人 藤原為氏
新後古 雑 住よしも今は 打 まぬおもひの 源宗良
拾遺 恋 ありけりな 打 すぬ草
後撰 恋下 ことはさて 打 まぬ人も
新後 恋二 我ちらぬ今はかへてなけくとも 打 まれぬへき 藤原為氏
新葉 雑上 花さかぬ山里は 打 まれぬ 源明宗
後拾遺 冬 志賀の浦 打 まれつゝ 右大弁通俊

新古 雑中 やまかけにすまぬ心はいかなれや 打 まれていつる月もある世に 西行法師
拾遺 恋 ちきりし月のはてなれや 打 まそくらす秋の夕暮 摂政太政大臣
続千 恋三 あやなくもなほ待わふる 打 まてみやつき別 前中納言為雄
新続古 恋四 今はたゝまちもし 打 まそまちし宵の命をも 藤原定成
千載 恋下 いくたひの我身ぬれけん 打 まきはらふのゝ 信阿法師
続後撰 雑上 六十まてかたみのおもひ 打 きゝおもふ年ふりにける 参議雅経
新続古 雑 行末もおもひまよへる 打 きゝけるのはの 入道二品親王
続千 雑 忘れては露のたまゆら 打 きゝくさもの秋の 小侍従
山家集 上 折れて花 打 きくからにあはれ
後撰 雑 なきてあはれ人の別 打 きくれそ今 天暦御製
拾玉集 六 紅葉をぬさと手向て 打 こゝろやなひの杜
風雅 秋下 年ことに 打 ことわりの 登蓮法師
拾遺 賀 みてもまた 打 み山もわれ
続後撰 冬 葉もなくは 打 ともあはれ 源道済
同 花 冬 しらぬはの夜の 打 とも月 和泉式部
後拾遺 春上 雪のうちも 打 ひろつむ
新続古 雑 うき身に昔とかはらぬ 打 ひかりあらん 従二位隆長

後拾雑秋　荻の葉にしをれしかるゆふべかな　おもひそふるの秋のおもかげ　前内大臣
後拾遺恋上　つれなき人の花ぞしぐれぬる　おもひはつねにもえわたるかな　民部卿経信
後古雑上　花乃色の今さかりなれみぬまに　おもひの色をあらはしぬれ　前律師慶暹
後拾雑中　かくばかりつらき後を何とうらむべき　おもひのうちにすみはてぬとも　平時廣
玉葉恋下　年をへて恋のなげきは郭公　おもひはつきぬ風のねぞする　刑部卿範輔
後拾遺恋　きえつゝやきみが袖に郭公　おもひはつきぬひとりなくらむ　皇太后宮大夫俊成
新葉雑中　わすれぬる千代の跡もあるらむ　おもひはあかぬそのむかしかな　法橋忠命
後拾雑中　ゆくへしらぬわかれとおもひしに　おもひはなみのかずもまさりける　右近大将道綱母
新古雑別　まよひぞめし猿のさけびを悲しみて　おもひなきみもきえぬべきかな　侍従隆清
玉葉恋下　昔みし月にも袖はぬれつゝ　おもひさだめて深くなりけり　僧正公胤
胡蝶
詞花冬　かくすらぬ冬のさむき山のはに　おもひなくともさすがなりけり　皇太后宮大夫俊成
新古雑下　世をさりて昔のかたみとかなしむ　おもひのこれるかなしさにこそ　成尋法師
拾遺雑秋　秋と心かくるはかなきはなを　おもひのかずもまさるなりけり　前大僧正慈鎮
新拾遺雑　秋とおもふことのはいつとなく　おもひよるみをこそそむくなれ　忠見
古今雑上　おもふことたえぬ流のきえやらで　おもひはけふもなほさかりなる　忠見
後古賀　ふりぬともそなたにけふはきみが世に　おもひをいはふのみはしらず　忠岑
入道前太政大臣

新葉雑下　昔おもふつきやこよひの夢路かな　おもひとなりゆくわがなかるらむよ　前大僧正公
後拾雑上　年もへぬ何をか今はかこつらむ　おもひとなりてあはれにぞ見ん　前大納言為世
新葉秋下　幾秋を送りむかへてつらきは　おもひとなりて月をぞみる　後醍醐天皇御製
後拾遺雑下　うちとけてかはらぬ秋の思ひ出に　おもひとなりつる人のかなしさ　禅心法師
新古冬　かきくらし年もくれゆく雪のうちに　おもひぬるよりさきにきえぬる　和泉式部
後拾雑中　むかしみし都のそらのおもかげ　おもひのこれる秋のよの月　前大僧正賢聴
新後拾秋下　猿の声もなかぬのたえまにさむき　おもひのこれる秋のよの月　光俊朝臣
新葉雑下　花のみさそひなくては何とせん　おもひぬるみをさらにかこつらん　従三位俊文
新古雑別　かへらん旅をはかなきと思ふにも　おもひぬるみをさだめてこそ　道因法師
後古雑下　なにとなく命を何とあはれなる　おもひのほかにぞさらぬかれ　信寳朝臣
新拾雑中　七十の秋のつもりの春にあふて　おもひそへしよの月をぞみる　後中院前太政大臣
同　つれなくも残るたのみを待かねて　おもひもかけぬ世のこりぬる　藤原盛雅
後古雑中　いつしかと世のうきことをおもひ出て　おもひとりてもかつなげくかな　平政村朝臣
新拾雑中　かたらひしあはれはかなき身にも　おもひそへてやかなしかるらん　頼阿法師
新子雑中　九代の君につかへてよをすぐす　おもひもつきぬみなれざりける　前大僧正道昭
新後雑中　見てもなほありしにも似ぬ面影　おもひそふるは後の世までも　前右兵衛督為教
新子雑中　思ひきやよそ七代の跡と七十乃　おもひのすゑもしらぬなげきを　法印隆俊
後拾雑中　さりともと昔はまたもおもひきて　おもひそむけきれぬなれならむ　正三位知家

續古雑中 さりともとおもひし人ハ声もせで おもひつきなき… 道因法師
拾玉集四 うつゝとも夢ともなくて… おもひその森にさくらん
同六 わけて又海つよりゆき… おもひその森に鳴こゑは
新勅雑一 かくてよに我身ありける… おもひその森のしたもみち 源泰光朝臣
新古夏 わすれきをまつ一… おもひその森の… 良石花光
後拾遺夏 東路のおもひでにせん郭公 おもひその森の夜半の一声 大江公資朝臣
金葉雑上 かりゆくかたの… おもひその森の… 源師賢朝臣
新千雑上 つくせめて… おもひその森の… 前大納言為家
拾玉集四 夜ふけて… おもひのほかに…
壬生二集上 旅ねして… おもひのほかに…
拾遺恋五 世やうき… おもひのほかの…
風雅恋 …… おもひの…
玉葉賀 なかき…君のちよ… おもひのまゝの… 民部卿為定
月清集下 …… おもひの松に… 前関白太政大臣
後拾遺恋 …… おもひの… 右大臣頼房
新後拾恋 …… おもひのふしの山… 津守棟国
後拾雑中 …… おもひの… 法印…
風雅神祇 世…… おもひのならぬ… 賀茂…

新古神祇 しらなみや…ひめこまつ おもひのいも… 入道前太政大臣
後拾雑 …… おもひのつき… 天台座主…
風雅雑下 …… おもひの… 藤原花秀
新葉雑上 …… おもひの…月の… 平惟様朝臣
後拾雑 …… おもひの… 権中納言公雄
風雅雑上 …… おもひの… 前中納言為相
新葉賀 この君と… おもひのまゝの… 前大納言為世
新千雑中 …… おもひのとりの… 右近大将…
續古雑別 …… おもひのまゝの… 清原元輔
新古神祇 …… おもひのかけ… 従一位国忠
後拾雑上 君… おもひのかきり… 従一位…
後拾恋 今…佛の… おもひのかきり秋の白菊 前内大臣
風雅雑上 …… おもひのかけ…月… 前権僧正…
同 と…… おもひの…秋の…月 法印源全
新千雑下 かり…… おもひの…… 法印延全
新後拾雑 …… おもひの…… 権大納言…
風雅雑上 …… おもひの…… 源高国
拾玉集六 君か代… おもひ……

続拾雑秋　しのゝめの秋のねさめはまさりけり　おひのつきせぬあはれなりけり　前内大臣

玉葉雑五　ありし世をおもひつゝけてまちわひぬ　おひのねさめは夜そなかきに　清原元輔

後拾遺　郭公おとろかすなり夜もすから　おひのねさめはあはれなりけり　従三位行政

続古今冬　いそやこの時雨を夜半に聞ぬれは　おひのねさめは袖そぬれける　後徳法師

同雑下　なかきよをいかてあかさむ　おひのねさめはおもひこそやれ　従二位隆房

続後拾雑　むかしとて今日ねさめ来しは　おひのねさめも夜そなかき　前大納言経家

同　あかぬ秋むかしをしのふ　おひのねさめのねられぬそ思ふ　前参議雅孝

続拾雑中　ゆふくれの山のはにかゝる　おひの寝覚にしのふ身の　信実朝臣

新後雑中　いとゝしくかたふく月の影をみて　おひのねさめはかくもあらむ　前参議経親

続後拾雑上　なかき夜の秋のねさめの　おひのねさめに昔ありき　天台座主公豪

新千雑上　みとせへて秋の夜すから　おひのねさめはおもひつゝ　照光院入道前関白太政大臣

続千雑春　花をおもふねさめの霜に　おひのねさめの一きれも　権少僧都為房

新千雑上　中々にあまの露の葉の　おひのねさめはねさめのみ　前大納言為氏

新後冬　時雨する夜の寝覚に　おひのねさめは萩の上風　従二位家隆

同雑中　いかにせむしのふの山に　おひのねさめは思ふらむ　前大納言経継

拾玉集四　おもひしる心のうちの　おひのねさめにけふも又　式乾門院御匣

続千雑中　あはれとや聞らむ　おひのねさめは起ていて　法印良宗

新後雑上　浦千鳥なにをうらみて鳴くらむ　おひのたのみはねさめなりけり　入道前太政大臣

新葉雑上　君か代はいかなるあとを　おひのなかゝそあまき命は　従二位俊文

続千雑中　いかにせむ月日ははやく　おひの身にしもあはれなる　法印覚懐

拾玉集四　あはれなり昔の友は　おひの波よるかたもなき　前大僧正慈鎮

続拾羈旅　今年ふりゆく人のすみか　おひの身よりかけ出つき　素暹法師

同雑下　ねぬ夜こそ秋風の音も　おひのねさめの月影に　前左兵衛督教定

続古雑上　さてもなほ露のやとりの　おひのたまつる秋の暮　前大僧正慈鎮

続後撰雑中　かきくらし秋の夜すから　おひのむかしをしのふかな　前大納言雅言

玉葉雑一　風をいたみいつもの　おひのおもひは秋の月　法印長舜

新千雑上　今はとてすきにし方を　おひのたのみも月影を　中院入道一品

新葉雑上　いつはりの世をさてもなほ　おひのうき身そ我身なりける　湛空上人

続古哀傷　思ひやれ君をわすれぬ　おひのなみたの花のいろ　前中納言資任

新後雑上　花もつみ秋の紅葉の　おひの波こそたちかへれ　欣子内親王

拾玉集二　もろともにおもひあまりの　おひのあらそひに　後光明照院入道前関白

新拾古冬　ちりしほる谷の流に　おひのもりのはたの　二条院讃岐

新千雑中　さらぬのみ流とおもふ　おひのさかりは　為相

続千雑中　つらくてもさすかにつらき　おひのうき身に　法眼行済

同　うきことは又たへても　おひのたちし思ひ出　法眼行済

続後撰冬　いかにせんひとりもいつと思ひきて　わびのなぐさめ年の暮かな　前大僧正慈鎮
玉葉雑五　うきことのみしげきうき世を出でぬれど　わびのまゝにてすみかはりぬる　二品法親王覚助
新後拾雑春　花もちりさかりの春の過ぎゆけば　わびのまゝてや衣かへけん　一品法親王寛尊
新後撰雑下　みやこをば霞とゝもに立ちしかど　わびのまゝてぞ秋をみるべき　法眼慶融
新葉雑中　かくれ家のやまとことばは絶えもせで　わびのこゝろをやるよしもがな　前大納言光任
続古雑下　身をうしといとひし世をもおもひいでゝ　わびのこゝろを時雨ぞまさる　平時広
続後拾雑中　藻しほ草かきおくあとの手向とて　わびのこゝろの猶ぞさらせん　前大納言為継
千載雑上　山桜咲きぬと聞きてなぐさめぬ　わびのこゝろはあくがれにけり　京極前関白家肥後
新後拾雑春　かずならぬ身はうきものゝ秋の月　わびのこゝろもはれてみるべき　前大納言為世
続古雑下　ちりぬべき花の梢にうき身をぞ　わびのこゝろも慰めにけり　前関白左大臣
拾玉集七　うれしさも今日の末にはなりにけり　わびのみさかりぞまされ　前大僧正慈鎮
続拾遺哀傷　君をおもふ宿にしぐれのふるをみて　わびのさかりぞつゆもかなしき　前律師慶運
新拾雑中　いつまでと世をおもふにも袖ぬれて　わびの寺にぞ涙おちける　弾正尹邦省親王
新続古春下　かぞへこしいくたびの花を惜しむらん　わびのすみかに春ぞ暮れゆく　前大僧正尊意
続古秋上　この秋もむかしのまゝの月影に　わびやはてなん人の心は　正三位知家
続拾雑春　ちりくて今いくたびか花を見ん　わびてそはる風を恨みん　光俊朝臣
新千冬　くれて行くもみぢもまたかつちりて　わびてまつ山のこのはをぞ　祝部成久
新後冬　あまつ風雲をはらひて　わびていくよの年のくれ　法印長舜
続古雑上　いかにして我がすむべきと思ひつゝ　わびの夜ごとの月やながめん　源有房
玉葉雑四　なかなかにそむけはいとゞうきものを　わびてとまりし我が身なりけり　前大僧正源恵
続古哀傷　さくら花ちるをみるにもかなしきは　わびてやくらすおもひそめけん　前左大臣雅信
拾遺別　つらからば別れむかへりみる　わびてはかなきこの世をば　よみ人しらず
新古雑下　つきもせぬおもひをこめて　わびて久しく世をすごしける　冷泉院太皇太后宮
玉葉雑一　いかにしてたちかへりこん　わびてよるべの白雲　前関白太政大臣
新後拾雑秋　むかし今ひとりのみかは　わびて世すての秋の夕ぐれ　大納言顕実母
続古恋下　花みてもなげきてのみも　わびてうらみのかゞみや　宜秋門院丹後
月清集下　もろともにみし月かげを　わびてぞすみぬる山人
拾遺哀傷　年くれて行きかふ人の上まで　わびてきくらん嵐をや
続古秋上　露おもみ秋をしるらん　わびてぞ月を見るかな　後鳥羽院
新後雑下　うきぬるをそむきて世中に　わびてつまこふ鹿の音　平宣時朝臣
同雑上　我がやどのひとりみるもかひなき　わびてつげしきのもと　前権僧正公朝
新千雑下　さむしろや夜すがらおもひあかし　わびてふるさとのゆめ　津守国助
拾玉集五　人のよのかれ野の草のはかなさ　わびてうき世にすみける　長房
続拾雑秋　志賀のうら月さへすみて　わびてのこる秋の夕暮　信実朝臣
新拾雑中　立かへりわかれし後は　わびてかゝるうき世を　前大納言為世
新後雑下　いやしき身のうさをしる　わびてもひとへにうき世　津守国助

新後拾遺釈教　八幡山さやけき影を嶋の松杖　おいてさらゆく老のさかをそ　源家長朝臣
新千載　鳴かぬぞまたでかへる八郎丸　おいてきくぞむかしなりけり　後照念院関白太政大臣
続古今秋上　ちぎりおきてまたこそつげぬ世の憂さも　おいてたのむ秋の夜の月　衣笠前内大臣
続拾遺雑中　いにしへの今をあらはすわが世さへ　おいてむかしわがみにぞしる　後嵯峨院大納言典侍
続古今雑上　この世にはわれやかへらんかたみにも　おいてなほきく人をまつらん　正三位知家
後拾遺別　かへりてはおもひやすらんわかれても　おいてひさしくみんとおもへば　藤原節信
玉葉雑一　風をまつ浦のまはまにみちくれば　おいてのみきく波のおとかな　入道前太政大臣
風雅恋　まつ人の心のうちはしらねども　おいまふ露の身ぞはかなき　祝部成仲
拾玉集五　木のはもちりてまた山の風　おいまよふ秋のしぐれを
続後拾遺雑上　秋ちかき庭のまさごに風ぞ吹く　おいまつのもとに風を吹く　源兼氏朝臣
新千載雑上　いつまでかおなじ月日のめぐりきて　おいきやおもはぬ年のつもりの花　待賢門院堀河
新拾遺恋　霧やあらぬ花のうつろふ色にだに　おいきのまつの年もふるらん　三条入道左大臣
続千載賀　引く人もなくてやとせをまつらめ　おいきのまつはかはらざりけり　後法性寺入道前関白太政大臣
新葉賀　浪ちかきたち君がよはひのかぎりをぞ　おいきのまつの千代にやちよを　光明峯寺入道前摂政左大臣
同雑中　神の代のむかしをいまにしのびつつ　おいきのまつもかはらざるらん　藤大納言経
風雅雑上　今宵またしのびてぞなくほととぎす　おいきもときはあかぬ袖かな　常盤井入道太政大臣
葵　ちりなむまちのこの花もおなじ色　おいもまた秋のこころをそへん
拾玉集一　ゆく年をいかにとかたる山のはの　おいもまた秋のそらをみるかな

壬二集上　さゆる夜はしもの鶴のなく声も　おいもしらぬ老の身のうさ
新後拾遺雑上　世のうさは今もむかしも古の　おいもぬらしと君のみぞしる　藤原範春
新後拾遺賀　菊の露つもりて淵と成ぬらん　おいもせぬ君が千とせの　後一条入道前関白左大臣
胡蝶　亀の上の山もとふべき春霞　おいもせぬ名をばこの世にのこさん
古今秋下　露ながらおりてかざさん菊の花　おいせぬ秋のひさしかるべく　きのとものり
壬二集下　ねぐらとて秋のいくかをかさねても　おいもせぬ宿もあきの風
拾遺賀　長月のおいせぬなかのかはらぬは　おいせぬなかの秋のことの葉　国経朝臣
続千載秋下　秋ごとにつきせぬ雲のうへの菊　おいもせぬ袖と白きくの花　二条法親王覚助
新続古今賀上　二葉よりひきてうゑけん人の　おいせぬ松のときはなるかな　柿本人丸
古今雑上　あひぬとてちとせの秋をかさぬとも　おいもせぬわが身まさにたえぬ　よみ人しらず
拾遺恋四　日々はすぎし女の身をつれなき　おいもせぬ身のなほぞかなしき
長秋詠藻上　さらぬだにかはりゆくよにおいぬれば　おいもせぬなかの秋の月
続古今恋三　かぎりあれば老の命もあさぢふの　おいてこそ浪の花をもみつつ　中務卿親王
詞花雑上　なのみして年のくれにかさねても　おいてのみおもひこそおもへ　和泉式部
風雅旅　あてもなき月にむかひて夜をかさね　おいのなみだの袖に朽ちて　藤原正範
千載雑中　いつかまたむかしにかへるべきかなと　おいもぬる身をおもひはてて　源信重
拾玉集七　夕立の雲のひまよりもるる月　おいぬれば秋の夜の月
槙柱　よる人のふかき風のさはぎにも　おいぬる身はまかせつつ

古今恋四　すまのあまの塩やく煙風をいたみ　おもはぬかたにたなびきにけり　よみ人しらず
伊勢物語　すまのあまの塩やくけふり風をいたみ　おもはぬかたにたなびきにけり
新後撰恋五　忘れける人のつらさにかへてみん　おもはぬ人のおもふことのは　前中納言為兼
夕霧　のぼりにし峯の煙にたちまじり　おもはぬかたになびかずもがな　よみ人しらず
続千雑上　墨染の袖にかゝりて露ならで　おもはぬなかにおもひけるかな　花山院内大臣
新千恋一　人しれぬおもひのけふりたちそめて　おもはぬかたにかけてたのめし　権中納言公雄
続千恋二　難波がたあしのうきねをたのめども　おもはぬ人にすみそめしかな　よみ人しらず
後撰恋四　こひしさをたのめしものをいかにせん　おもはぬ君をおもひつるかな
山家集上　暮れぬともかへらぬ人をまつ身にて　おもはぬ袖にむすぶ露かな
拾玉集一　露しげきあきの野原をわけゆけば　おもはぬ袖にうつる月かげ　権僧正慈意
続千雑中　いにしへのおもかげみえて月影の　おもはぬ月にぬるゝ袖かな　権中納言実経
拾玉集四　たのみこしみかさの山のこのもとに　おもはぬなかにすむ心かな
新千恋二　よしさらばたえなむ人のうき名にも　おもはぬなかやいつはりの世　小町
壬生二百下　まてしばしもろこし舟のよる浪に　おもはぬ中はかよふ人かな
新続古恋四　ひとりねのあかつきつゆのおきふしに　おもはぬ人にかはるなみだか　雅永朝臣
新千恋三　はかなくもおもひそめけるくれなゐの　おもはぬ色のあはれなるかな　一条前太政大臣女
新勅恋五　たのめこし雲井の月のかげもなし　おもはぬ中にゆきかよふらん　従三位能宗

古今恋五　唐衣なれにし人のおもかげに　おもはぬ中もいとどまされる　よみ人しらず
風雅恋二　夢路にもとけてもみえぬつれなさに　おもはぬなかの夢ぞはかなき　安嘉門院四条
新古冬　風吹けば峯にわかるゝ白雲の　おもはぬかたにたちさわぐらん　藤原秀能
壬生二百上　花ゆゑに山にすまれしこの春は　おもひもよらず都こひしく
後撰恋中　うらみてもかひなきものをおもひつゝ　おもはぬ人にしたふなるかな　藤原朝綱
新拾雑上　一筋にうき世をすてし身なれども　おもはぬ山にすむ月のかげ　基俊
山家集上　あはれにも山がつのすむ夕けぶり　おもはぬ山によそへてぞみる
夏深橋　のぼりつゝさぎりの空にみゆるかな　おもはぬ山にたえまなき雲
新続古雑中　行末をながくもたのむ春の日に　おもはぬ山のよそにおりけり　兼仁親王
大和物語　花なれやきみがかざしにうつろひて　おもはぬ山の世にふりにける
新拾雑下　をちかへりなくほとゝぎすこゑたえて　おもはぬ宿にねをやなくらん　藤原実方朝臣
玉葉恋三　あはれなりむかしの人の恋しきに　おもはぬゆめにみつるおもかげ　院御製
拾遺恋二　秋風のさむくふくなるかりがねも　おもはぬひとにこゝろかけつる　よみ人しらず
続後撰恋三　おく山の岩のかけみちふみならし　おもはぬ人によするそでかな　後嵯峨院御製
新古恋一　雨そゝぐまきの下葉のつゆけさに　おもはぬひとにみせもこそすれ　読人しらず
新続古恋六　ちる花をかつみるほどに年ふれば　おもはぬ人にまよふこゝろか　性助法親王
古今恋一　行水にかずかくよりもはかなきは　おもはぬ人をおもふなりけり　よみ人しらず
伊勢物語　ゆく水にかずかくよりもはかなきは　おもはぬ人をおもふなりけり

拾玉集二 光もこれ(?)ほとけのみちの わすれぬ人にあらはしてけり

伊勢物語 秋の夜の千夜を一夜になずらへて わすれぬ人をおもひこそすれ 光俊朝臣

後拾遺恋二 あふことをまつにいのちのかゝらずは わすれなんとや君もおもはん

拾遺恋三 月影をわがみにかふるものならば わすれられても恋しからまし よみ人しらず

金葉恋下 あま雲のかぜのまにまにはなれけん わすれられぬる身をいかにせん

漂漂 うちつけにわすれぬとおもひしか わすれもやらぬことのはにして

狭衣三 かへるさもむかしのまゝに わすれずぞ おもひいでつゝとふ人もがな

玉葉恋 なきの葉のちりにし後もわすれねば わすれぬ人のつらさをぞ見る 西行法師

拾玉集三 いつとなく人の心のかはるとも わするなよとぞいひしことのは

古今離別 白雲のやへにかさなるをちにても わすれんとおもふ心なきかは つらゆき

拾遺恋三 わすれぬるきみはなかなかつらからで わすれぬ我ぞうきみなりける

新後撰恋三 待ほどにかくさへなりぬわすれずと わすれずとてもいかゞたのまむ 源具親

新続古今恋 わすれじとおもふ心のかはらねば わすれぬ人のとはぬくるしさ 前大僧正果守

壬生二郎中 山もりもえぞしらざりけるわすれずて わすれぬ人のおもひゐるとも 慈円

後撰恋一 わすれなん我をもなにか恨みまし わすれずとのみたのむなれども よみ人しらず

後撰恋四 あひみても山のはにとぶ雲なれば わすれてもいかゞとおもふぞ 源為氏朝臣

後撰雑中 今宵(?)はよそにのみこそ見つれども わするゝ程の恋のつらさは 中務卿宗尊親王

壬生二郎上 梅の枝に鶯なきて鳴ぬれど わすれぬものは花にぞありける

新続古今下 あふ坂のせきのこなたにかきくらし わけ入て見る山のかひもなし 後照院太政大臣

新千載秋 花にのみ秋のもみぢのにほふらむ わけ入ても見ぬ秋の山 二条院讃岐

拾遺愚草中 あしひきの山ざくら戸をあけぬれば わけ入ても見る花のしら雲 藤原家隆

拾遺百首上 ゆかりとてたがいはひけむさかき葉の わけ入るとしもこれ(?)ぞ見しかな 藤原清輔

新千五百番 あしひきの山にながれていとかはし わけ入るさへも花ぞちりける 藤原康光

続後撰恋 見しまゝに夢かうつゝかかすみゆく わけ入てのみ見るぞ悲しき 嘉陽門院

新勅撰下 花をのみおもふ人のたよりには わけ入ても見む春の山もと 前大僧正慈円

新勅雑一 今はとて見さゝん秋の空までも わけ入てみれば夕暮の山 藤原為家

新古雑上 ひとりのみわが身ひとつの秋なれや わけ入ても見る月の影かな 殷富門院大輔

拾玉集六 法の水あさくなりゆく世にしあれば わけ入て見よひえの山寺 慈円

山家集下 柴の戸に人のかよひもたえはてて わけ入る神の社ありけり

新後雑上 わけきつるあとより風の吹きまよふ わけ入る道のすゑのしら雲 光俊朝臣

拾遺百首上 松風の吹くをたよりにあまをとめ わけ入る鳥のさきの世をしれ

新千雑上 ちれはてゝ花も嵐もさそはねば わけ入るほどの山ぞこひしき 丹波長有朝臣

須磨 ひさかたのあまの岩戸のあけぬれば わけ入る道も水ぞさやけき

新続古恋三 あらぬ世のしらぬ道をもわけ入て わけ入るばかりの後の月 澄覚法師母

後拾古秋上 あけぬとて秋の萩の上葉にわけ入て わけ入る秋の夕風 平政村朝臣

拾遺愚草上　月ゆへにあまりもそらにすむ心　ねりへつし秋乃夜はた空

新古今羈旅　めくりあふけふ芦のこゑをと　ねりへハ月のうそやとらん　前大納言為氏

同秋上　うちねふりかくあたる秋の夜　ねりへハ月のひかりさすなり　京極摂政前太政大臣

後拾遺哀傷　ひとすちに契りしあとのつらくと　ねりへハねのとかくる袖るか　和泉式部

狭衣四　かけまなこさねぬよもすがら　ねりへハ末の紅葉ちらそ

拾遺貞外下　まへてつまれらも世の採花　ねりへ丈行くなみちりあらん

後拾遺神祇　光を世と神やうらむ浪の滝　ねりへハあひく我今下うれ　賀茂成助

壬生二百下　おもふ海やえそうらむ風嫌る　ねりへハあひく風ハ吹くらん

新拾遺雑四　みつうきをものこれなみ蔵つと　ねりへハむしのうられのとすう

拾遺愚草上　そうりとて月のんを流る手　ねりへハうとさ秋の移さ色と　能因

長秋詠藻中　るかのおもへの採みしてよ　ねりへハうれなさそ

風雅雑上　歎くとて袖の露をぬれぶ　ねりへハうれ秋の秋乃月　土御門院御製

新勅撰　今をこえ物ひつかひよかすの山　ねりへハうれさ紐か紀に　前関白

新後拾遺　恋しあん劉ををうん歎しう　ねりへハうれ来ぬくの露　津守国冬

後拾遺　まけうよ袖のうら涙そこの夜り　ねりへハ末も揺の歳そう　常盤井入道前太政大臣

山家集下　ひとよさくうらみつつかくらん　ねりへハうしやへの君あれ

長秋詠藻上　ふよ絶くゆくるぬらん山さくら　ねりへハ涙は思ふあくま

後拾遺雑下　ぬさなうつ秋はなうて物さそ　ねりへハおつつ秋なみさそ　普光園入道前関白太政大臣

拾遺愚草上　見しをこそすまさわしんみすき風　ねりへハおもふりうきを世を

拾遺貞外上　あうらみとこめ月のうらぬと　ねりへハあきこれ衣はは

新古今雑下　いくろよるすと折くて雨なり　ねりへハ折さあれもつれ　寛蓮法親王

後拾遺恋一　恋しさもつみあけぬまそれハ　ねりへハやそうつつまそ　皇太后宮大夫俊成

新後拾遺　漏りあつ水すも月やうろと　ねりへハやそてまむこそあ　顕昭法師

後古雑上　末は葉のこえまてあね附論と　ねりへハまうもふう流るか　源具氏朝臣

拾玉集七　法乃名を康呼の人けるもと　ねりへハ今日も紅葉夕露

壬生二百下　水なあきうくれぬ池のを持む　ねりへハあうきみハ来しらん

同上　雑と流きうきよなほ尾衣　ねりへハ涙さ恨あすりくり

新勅撰二　人あれぬうさうにちを松ろ手来　ねりへハきうそ村を秋に流　前大納言経房

山家集下　さうりなぬ本もぬく露の明りのう　ねりへハ雪とらうる風さみち

新古雑下　さうかよれはとかりうう苦れ松と　ねりへハゆあれのなをすれ　後鳥羽院

新千秋祇　折られうれかれへのとれを　ねりへハみなとも折らのむふ　中院通世

後拾雑中　とあかくうまう哀ハ世のならいと　ねりへハ方物も恨なる流　平親清女

伊勢物語　われならぬ物あり人ハ文もわしと　ねりへハみいの下のまもなり

新古雑下　ゆらとも見なのむひこうれ知来も　ねりへハ思ふぬ世み流すむ　賀茂季保

拾玉集四　まのてこうわれうんの雑両と　ねりへハ人を恨つるうは

後拾恋三　名とり河いつふせんともまうまと　たへ人ハ人を恨なうれ　前中納言定家

續後拾雜下　つきて世をなほさのみやは歎くらん　おもひのほかにしらぬ我身を　前右兵衛督為教
新拾恋五　まむ月の涙のかげはかはらねど　おもひ人のつらさなりけり　前中納言實教
新續古恋四　かぞへても別し時はあらぬかな　おもひ入人のつらさはゆかりなれ　公守
續古秋上　いつとなく世に秋のつらさをぬらん　おもひいづる月のかげの哀にぞ　今上御哥
後撰羇旅　さらぬだにかわく涙のかはらずと　おもひいでて世をなげく夜半のつき　前太政大臣
新拾秋下　兼好なりしくらき世をなりぬらん　おもひいでし秋の夜半の月　後嵯峨院御製
拾遺別未　あまたたび行く人の名残をしみける　おもひいでつるきみが山の松　安法法師
詞花別　よそにても見しはつらくや旅なれば　おもへどもえこそあはぬなりけれ　源俊頼朝臣
古今恋四　おほぬさのひくてあまたに成ぬれば　おもへどえこそたのまざりけれ　よみ人しらず
伊勢物語　大ぬさのひくてあまたと成ぬれば　おもへどえこそたのまざりけれ
壬生二品上　さやけさは秋よりほかの影なれど　おもひのほかのかたみなりけり
拾遺恋未下　さきだてて世をいとふとも思ふとき　おもひのちの涙なれ
新古哀傷　見し人の手もまだなき世の契かな　おもひのほかにすみわたる月　寛方朝臣
新葉雑上　ありし世もなほわかれぬる秋の空　おもひかりにて月やみるらん　前右近大将宗尊
後拾遺哀傷　あはれあはれとあはれとよばれても　おもひにぞ思ひはてぬる　藤原實方朝臣
同秋上　宿ごとにおなじ野辺のかげなれど　おもひわかれぬ露ぞこぼるる　御製
千載雑上　行くとしの涙にかはらぬ身となれば　おもひかねぬとこそなけれ　祝部宿禰成仲
新續古羇旅　旅の空あはれこそたちわたる時　おもひしりぬ秋の月かな　大納言經信

詞花恋上　雲まよふ人の心はしらずとも　おもひしらせぬ白菊の花　源家時
玉葉雑一　月も今あはれの清水をむすびて　おもひしらせぬ世をもおもはむ　前中納言雅具
東屋　里の名も昔ながらに見し人の　おもひかはれる世の月かな
新千載雑中　つくづくと思ひさとしの世の中は　おもひしらせて老を老かな　法印長舜
千載雑上　何となく又むかしの世をこひて　おもひしらずや山の秋の月　法印静賢
續千羇旅　しるべなき旅の袖をもぬらすかな　おもひいでてみる秋の月　土御門院御製
新拾哀傷　いのちあるものからおもひの　おもひけるかなしき秋の暮　前大僧正道玄
玉葉雑四　なかなかにおもひてまた見つる　おもひけるかなしき秋の月　後京極院御製
新後拾恋四　おもひしる世にあはれと人もみえけり　おもひけるかなしき別を　今出河院近衛
玉葉恋下　ありし夜の契も今は人のみぞ　おもひけるかなしき契ぞ　前中納言定家
同秋下　いつとなく立つ秋風のさびしさに　おもひけるこそ秋の夕暮　藤原為基
拾玉集五　おしなべて人のおもひは吹く風の　おもひけるかなしき秋の夕暮
玉葉恋　うちみだれ涼しき風のなかに　おもひけるこそ神の誓ひ　永福門院
新千雑上　つらからぬ人のもとへの神の宮　おもひけるかな秋の月かげ　小侍従
新千雑下　夜も月のつらきままに秋はてぬ　おもひけるかな昔なりけり　前中納言雅孝
月清集　身をしれば秋の夜すがらむかしをも　おもひけるかな有明の月
続拾恋下　心をもおさへてぬる人あらば　おもひけるかな世のうさを　みつね
伊勢物語　人しれぬ思ひのやまもむかし　おもひけるかな

新勅恋五　人こゝろうき世のやまの…　わかうけ…　よゝ…
金葉恋上　かゝる山…　わかうけのこたゝ…　太宰大弐長実
同秋　あはれ…のやまの…　わかうけのたゝ…　中納言経則
玉葉恋二　照月の光は…　わかうけのこ…　崇徳院御製
拾遺雑上　…　わかうけ…　みつよ
古今六帖　…　わかうけ…　つゆき
続拾秋下　むかし…山…　わかうけ…　同
続後撰恋三　…　わかうけ…　光孝天皇御製
新千恋二　みちの…　わかうけ…　前中納言…
新拾雑上　み…　わかうけ…の月　後宇多院御製
続千恋三　…　わかうけ…　院…
続古恋下　あはれ…の月…　わかうけ…上人　今出川院…
新後撰雑下　かきくれ…　わかうけ…　伏見院御製
同　…かゝり…　わかうけ…なる…ん　法眼宗源
新千秋上　もみち…雲井…　わかうけ…月の…　花園院御製
東屋　…　わかうけ…のこ…　前…雅有
新続古冬　…　わかうけ…の…の…　…

新後雑下　別…の…月　わかうけ…　源…
風雅雑下　…昔より…き　わかうけ…の夕…　…上人
新拾恋下　なれ…雲井の…世…　わかうけ…の…　伏見院御製
玉葉恋三　…　わかうけ…　…
新勅恋四　…あさ…の世　わかうけ…　後京極…
新古恋三　かけ…　わかうけ…　…
新後古雑上　…浦の…　わかうけ…月…　…
続後撰恋五　月や…　わかうけ…妻や…　従大納言…
続拾恋三　はかな…の人の…　わかうけ…の月　入道二品親王…
新千恋五　我…　わかうけ…　…
拾遺員外上　…　わかうけ…冬　…
風雅恋三　…川中…　わかうけ…　…院…
続古雑上　…大内山の…　わかうけ…　…
風雅雑上　…雲井の…　わかうけ…　従三位…
拾玉集三　…の…世の…　わかうけ…　…
玉葉雑四　…世の…波の上…　わかうけ…月…　…
続千恋四　…　わかうけ…　…宗
新続古恋四　…　わかうけ…のさ…　平宗宣朝臣

新後拾恋四　待とせしちきりもむなしく[illegible]　おもかけのこる山のはの月　西園寺入道前太政大臣

新拾恋三　忘れまよ今はつひにきねくの　おもかけのこる[illegible]の月　法印頼冷

續後拾羇旅　ちかひ給ひのこるみとまでや契りけん　おもかけのこす秋の夜の月　従三位為理

拾遺愚草　遠さかる月日も人にそへても　おもかけはそこともなくて絶えぬ　女御徽子女王

新續古羇旅　月日へぬ尋ねてきぬる人の　おもかけのこるふるさとの空　権中納言[illegible]時

續拾雑下　君こふる涙に月はみえねとも　おもかけのこるたえせぬ　待賢門院堀河

續後撰恋五　まずれん人はあまりも見えねとも　おもかけのこそあかぬ[illegible]　[illegible]法師

新勅雑三　うちむれて[illegible]宮の昔まて　おもかけはつねにさの別か　伏見院[illegible]

風雅恋二　みやこんまてやまんとまちのよ　おもかけはすてぬよものゝ月　[illegible]

拾玉集五　冬そまし[illegible]風情　おもかけのこそ[illegible]　権中納言[illegible]母

新葉雑上　忘られぬ雲井の秋の昔まて　おもかけのこる[illegible]　大納言雅信

新古恋下　あはれ我[illegible]さかりもとめぬ　おもかけのこる[illegible]の月　中院右大臣

風雅恋四　うき[illegible]きえ　おもかけの[illegible]　右中納言[illegible]

續後拾秋上　さ月まつ[illegible]　おもかけのこる[illegible]　法皇御製

續千恋一　山高み[illegible]　おもかけのこす[illegible]　権大納言公明

新千秋下　山高み[illegible]月[illegible]　おもかけ[illegible]康の[illegible]　贈従三位為子

同夜　袖の香は[illegible]　おもかけ[illegible]　[illegible]

新拾雑上　冬枯の[illegible]　おもかけそ[illegible]　大江忠廣

新後拾春上　さくらさく花[illegible]　おもかけそかゝるたつ雲　[illegible]

續古雑上　人の世は[illegible]　おもかけはけふあさちの[illegible]　源英明朝臣女

拾遺[illegible]　そこはかと[illegible]　おもひ[illegible]　為家

千載恋一　歎きあまり[illegible]　おもひ[illegible]　源明賢朝臣

風雅恋三　[illegible]　おもひ[illegible]　左京大夫[illegible]

山家集下　[illegible]　おもひ[illegible]

拾玉集六　ゆく[illegible]　おもひ[illegible]

同　[illegible]　おもひ[illegible]　源兼澄朝臣

續千恋一　[illegible]　おもひ[illegible]

湊漂　[illegible]　おもひ[illegible]

新後雑下　[illegible]　おもひ[illegible]　天台座主[illegible]

壬生二家上　[illegible]　おもひ[illegible]

拾玉集一　[illegible]　おもひ[illegible]

古今秋上　[illegible]　おもひ[illegible]　[illegible]

後拾遺恋一　[illegible]　おもひ[illegible]　菅原為時

新勅恋二　[illegible]　おもひ[illegible]　殷富門院大輔

續後撰恋一　[illegible]　おもひ[illegible]　式子内親王

新後雑中　[illegible]　おもひ[illegible]　権僧正[illegible]

後拾遺恋四　夕暮はあはすまてそおもひつと　思ふにはたのみもかなはぬなきか　西宮前左大臣
山家集上　しつのめかすくもかいとるいそかひて　思ふまゝにも恋もするかな
續拾雑下　たらちねのあとのかたみと見へきよかなしと　思ふまゝにつけて物そ悲しき　従二位家隆
同　我方のさきそふ行くもしりくと　思ふに一きはに老そかなしき　信實朝臣
千載雑中　かくはかりうきみなれとも捨かたき　思ふになれはかなしかりけり　寂然法師
新續古恋五　頼てもまたまことそこは心つく　思ふにまかせぬ人のこゝろは　前中納言定宗
風雅恋一　これねさてそれそうち思ふよ　思ふにまけて人もこそしれ　前大納言為氏
拾遺愚草上　うきさへ今はとのみて思ひつゝ　思ふにまきれたえすよそなれ
續後拾遺雑下　いつへを思ふ老のちとせと　思ふにはふりて涙のかれ
新拾恋一　山川の瀬々の岩なみせきもつ　思ふにはあまのもしほの雨に　津守國助女
續後拾遺恋　つく秋の宵の一夜をわすれても　思ふにもあるゝ月のかけかな　前大納言為氏
續千雑下　世中にありしも人のためかなと　思ふにもあかしそまさるき
拾玉集五　うけへき世のことわりなき　思ふにもぬるゝ袖かな　よみ人しらす
拾遺愚草上　荻の葉にふく秋風をきけはなほ　思ふにまるゝ風のさわかし　大僧正道順
續古又哀　むそちの秋のまの風の音は　思ふにまさて草ふかみえ　寂蓮
同雑下　思ひつゝいつかははるゝ玉章も　思ふにとのかはらぬ身なれ　思順上人
月清集上　いとひても猶いはふへき世の中を　思ふにもこひしからぬ中な　前大納言經平
人めみぬ岩の中にもかくれて　思ふにてまつ雑思ふかな

新後拾遺雑秋　いかにせよとてみつの白雲の　折ふしにそてつゆけかりけれ　後鳥羽院御製
玉葉雑三　何のこと行き世の中にあはれ　折ふしにいふも誠ありけるや　前右近大将朝綱
同恋三　つれなきを君かことにてまつ今　折ふしに心やすらかなる　忠岑
新千恋一　いせの海のあまのをふねのよるへなき　折ふしにもなほ恋しきは　入道前太政大臣
新續古羇旅　草むらをて旧都の秋も哀也　折ふしにはやりてゆくほと　前中納言雅孝
新拾恋二　むさしのゝ露の浦の清ぬれく　折ふしにそむかれやまるゝ　入道二品親王尊
新千恋二　なかくへむもなき子もたもとは　折ふしにせて恋やまさるほと　為道朝臣
玉葉恋五　忘るをとうしもうらみ行るれや　折ふしにかはらぬ身そなかれ　重之女
續古秋上　夏衣あをさきへりけりおきて見を　折ふしにまつ身のうちの秋　中務卿親王
玉葉雑一　秋よりもさひしき人も身になりて　折ふしのさひしくもまたあはれ　源具親朝臣
金葉恋下　身のうきはとのよしの海に成ぬる　折ふしのくるまてはやれの空　よみ人しらす
續古羇旅　ゆくも帰るもいふなりこれ　折ふしのはかなき旅さなる　源頼武朝臣
新葉恋二　数あまるみもせぬ夏とかくらも　折ふしにしのはの雨は涙もあらせん　安嘉門院四條
續千恋二　あまりにて浦の煙の末さへも　折ふしにもとひぬるそ袖　東宮傳師信
新拾恋三　むかしをそれとのまろねさへも　折ふしにあひとひぬるよ　左京大夫義
續拾恋二　ぬるゝともうへのまゝ秋にて　折ふしにくるへき露も後　前右兵衛督為教
續古秋上　夜ひくとやへまさる女郎花　折ふしに風も吹けは　よみ人しらす
後撰恋六　白雲のゆくへき山のさためなく　折ふしにも風に世をうらむらん　同

新古羈旅　袖にふけさぞな旅ねの夢もみじ　思ふかたよりかよふ浦風　藤原家隆朝臣

玉葉雑二　涼しさは沖乃玉もかくらく　思ふかたより風や吹くなん　弘恒

須磨　恋ひてちゞに思ひつねに浦なれば　思ふかたより風やふくらん

新千恋一　須磨の蜑の藻塩のけふりなびくとも　思ふかたより風もふかなん　花園院御製

月清集上　とはゞやと思ひし人を…　思ふかたにはけふりきえなん

後撰賀　ことゝいはゞ我もさきにぞ…　思ふかたにあきは来そめつ

山家集下　いつくまで稲かりくてもいとなきに　思ふことにあかすそ有ける　よみ人しらず

後撰恋一　ちかうきて知らぬ人もなき…　思ふことをまこときかしの露

新拾恋一　いはせめて思ふ中乃玉章に　思ふことはおほかりけれんやそ　中務

新古恋五　芦垣のまぢかきほとにすみながら　思ふ心のうちにかくされ　花園院御製

続千雑下　ちかうきてきゝもなれなん…　思ふかひなき身は我なり　山口女王

拾遺恋三上　秋ぬくもききの河浪…　思ふ心を我こそしらめ　平宗宣朝臣

壬生二下　いつやその月のしらずや…　思ふこゝろのおくの秋風

壬生二中　嵐吹く山のみね乃…　思ふことのはなきにのみ

新古雑上　風そよぐたゞ世乃中…　思ふ袖もぬれてやせん

新拾恋二　みをしる人の…　思ふことなきやうにしも　守覚法親王

古今恋四　天の原ふりさけ見れば…　思ふちからに…ぬるかな　藻壁門院但馬

山家集　よしや世の中…　思ふかたへは人ぞこひしき　よみ人しらず

続拾恋二　みちのくのしのぶもぢずり…　思ふかひなき身をいかにせん　和泉式部

拾玉集五　かくてもや君がためにと…　思ふおもひをしらせてしがな　正徹

拾遺恋五　あら玉の年の…　思ふ思ひのたへずもあるかな

続拾雑中　あらためむ世をすてゝ…　思ふおもひのたえぬこそうき　後京極摂政前太政大臣

玉葉雑二　梓弓引きてもいまは…　思ふ事の末をしたへば　二条院讃岐

新後秋下　いかでかも老せぬ秋を…　思ふこゝろの行へしらずも　前大僧正慈鎮

同雑下　いかにせむむかしをしのぶ…　思ふことなきわが身なりせば　寂蓮

千載羈旅　なれぬるや我身の…　思ふとも知らでや人の　上総乳母

続拾遺秋上　天の河とわたる舟の…　思ふともかよふべき道　藤原為信朝臣

新千恋四　梅の花香を吹きよする…　思ふとも君はしらじな　左大臣藤原頼時

金葉雑上　さしもやはなれしこの世の…　思ふとも心をとめて　六条右大臣室

同秋　ことしより見えぬ雲乃…　思ふとも月をなげきて　藤原家経卿

詞花恋　さらぬ花風にちらぬ…　思ふともよそにしもあれ　大中臣能宣朝臣

続拾遺雑一　われひとりあはれと思ふ山里に　思ふともなき月もすみけり　藤原為時

同恋　郭公われもそれにてまちわびぬ　思ふとはしらでかなしき　慶範法師

後撰恋一　あひみてはなほ…　思ふとも…らぬ　よみ人しらず

拾玉集三　いつまでか月の…　思ふとも…

拾遺雑上　よひのまに…　思ふとも…　源景明

長秋詠藻 みつのまさきよふれすまぬ夜は 思ふことみな法とこそきけ 大僧正慈圓
同 いつもそれ見まそてもかねも 思ふこころはいかなるみやけん 正三位知家
拾遺愚草下 世中をかくいひ思ひてもう月よ 思ふこころのいつまでもちらん 参議雅經
新後拾遺一 きらやいふめてもなれの吉の露 思ふこころは深山出てもとも つらゆき
風雅一 何をとふめるる吉をかをを 思ふこころは年ふる人のかゝる 大貳三位
拾遺別 あまるるぬひかれとそる衣 思ふこころはちかきまころ 前右兵衛督為教
新拾遺一 清く起むく此人の今りはほ 思ふこころをまつりも世 大貳三位
玉葉秋上 鳴あらに都とやきたつきを 思ふこころはかわる心も世 前中納言定家
拾遺愚草上 氷らさる人つてあるぬ跡まるま 思ふこころは錦のあそすも 前中納言為家
後拾遺夕紙 哀くまつてもいちしるき雲 思ふこころは風よふ程も 為道朝臣
新千載四 むなしれ秋のさうれ紫をくき 思ふこころはまさこゆき 前大納言實教
新後拾遺別 きまむりも世そその氷まえさよ 思ふこころもそほれつる 業平朝臣
新葉三 下須のあく流松まうさかと 思ふこころは夜のまさつつ 權大納言宣實
続後撰三 つそてみあらん此鳴らん人もあなを 思ふこころは錦ぬね夜のか 讀人不知
續後撰三 つそてみあるかんなもえ 思ふこころはかれのこぬかも 右近大將道經
新勅三 まくれてつもて桜ゆるも見せ 思ふこころはかさくこぬるも
玉葉一 其月はうのちの此好の色 思ふこころはをこぬらも
新古雑下 まそるぬ我身そつるきあらもと 思ふこころはことをまかせて 右近大將道經

玉葉三 あやきみゆありてゆすて浮世は 思ふこころは人のかしられ 宜秋門院丹後
後千一 まよしの岩もれ氷のやまきま 思ふこころをいのそりきさん 待賢門院堀河
風雅雑下 我とて我神をみふ人をこれ 思ふこころをおもいつてさん 源雅頼
玉葉三 玉章にむとぬ年をむ人も 思ふこころをわくらやねから 永福門院
新勅三 恋誰か我すくへの関あれ 思ふこころと結さめん 勝命法師
玉葉一 浮ねきまれなそ世をすう宿を 思ふこころを語りまつて 廣義門院
千載一 金されぬまれ紫れのむの氷 思ふこころを加さあまきや 右大臣
詞花秋 積すゆきもさえと雪の 思ふこころをぬまやまし 攝政通卓臣
玉葉三 人をまぬらすもれ斜あらは 思ふこころをみるへへいあん 参議雅經
新拾一 あらつつ吹う流のさうるも 思ふこころをつもてるか 前大納言實明女
新葉雑上 かさもむ花月をみるよまと 思ふこころを稻のれつ 前大納言守房
後撰三 かりしきあちわ楼よれるを 思ふこころを中宮まて事人 よみ人しらず
同恋二 あきあらうつれも清てほ 思ふこころをえゆ家の 貫之
新千恋二 貴み川むちの波のゆふけつ 思ふこころをあられ見るよ 等持院贈左大臣
同雑中 我むそそ宮れ荻は末までと 思ふこころと思ふ夜かめて 一條院太上
拾遺恋一 るあまいつつそもちもちは 思ふこころをちりの月なき 貫之
千載恋一 浦とうぬ人をらめてを恋 思ふこころよ人もらせよ 二條太皇太后宮肥後
新拾雑中 むそあれなうもの夜と家と 思ふこころをやちら風なら 源和義朝臣

続後撰羈旅　いつはりと君をまつ[illegible]　思ふこころ[illegible]　貫之

拾遺恋一　いつとなき[illegible]　思ふこころの[illegible]　よみ人しらず

拾遺恋五下　うれしき[illegible]　思ふこころの[illegible]　よみ人しらず

拾遺恋一　いかでかと[illegible]　思ふこころの[illegible]　源忠郎下

拾遺恋五　[illegible]　思ふこころの[illegible]　よみ人しらず

後撰恋四　[illegible]　思ふこころの[illegible]

拾玉集二　秋の月[illegible]　思ふこころ[illegible]

壬生二下　[illegible]　思ふこころ[illegible]

玉葉恋三　[illegible]　思ふこころの[illegible]

拾玉集二　[illegible]　思ふこころ[illegible]　従一位教良女

風雅恋三　[illegible]　思ふこころの[illegible]

狭衣三　[illegible]　思ふこころ[illegible]　宣光門院新右衛門督

新拾雑中　[illegible]　思ふこころ[illegible]

続後撰恋三　[illegible]　思ふこころの[illegible]　入道前太政大臣

拾遺恋五　[illegible]　思ふこころ[illegible]　よみ人しらず

狭衣四　[illegible]　思ふこころ[illegible]　是則

拾遺恋五　[illegible]　思ふこころの[illegible]　伊勢

同恋二　[illegible]　思ふこころ[illegible]　よみ人しらず

新古恋一　年月は我身にそひて[illegible]　おもふこころの[illegible]　西宮左大臣

玉葉雑五　[illegible]　おもふこころの[illegible]　藤原為仲朝臣

後撰恋三　[illegible]　おもふこころや[illegible]　平宗宣朝臣

千載恋　[illegible]　おもふこころや[illegible]　源俊頼朝臣

古今恋一　[illegible]　おもふこころ[illegible]　よみ人しらず

狭衣三　[illegible]　おもふこころ[illegible]

柏木　[illegible]　おもふ[illegible]

拾遺恋中　[illegible]　おもふ[illegible]

後撰拾恋二　[illegible]　おもふ[illegible]　西園寺入道前太政大臣

拾玉集六　[illegible]　おもふ[illegible]

拾遺秋　[illegible]　おもふ[illegible]　よみ人しらず

新葉雑中　[illegible]　おもふ[illegible]　中務卿宗良親王

拾遺真外上　[illegible]　おもふ[illegible]

新拾秋上　[illegible]　おもふ[illegible]　読人しらず

玉葉恋三　[illegible]　おもふ[illegible]　躬恒

狭衣四　[illegible]　おもふ[illegible]

古今雑下　[illegible]　おもふ[illegible]　よみ人しらず

玉葉雑五　[illegible]　おもふ[illegible]　法印忠快

拾遺愚草中 [illegible] 後九条内大臣

新拾遺羇旅 [illegible] 常盤井入道太政大臣

続拾遺賀 [illegible] 後京極摂政

千載冬 [illegible]

拾玉集六 [illegible] 藤原秀長

新千載雑上 [illegible] 皇太后宮大夫俊成

新続古今冬 [illegible]

壬生二百下 [illegible] 章義門院小宰相

玉葉冬三 [illegible] 和泉式部

千載恋四 [illegible]

拾玉集冬 [illegible]

壬生二百上 [illegible]

拾遺愚草 [illegible]

風雅恋二 [illegible] 従二位為子

拾遺愚草 [illegible]

玉葉雑冬 [illegible] 後山本前左大臣

風雅雑下 [illegible]

玉葉冬 [illegible] 躬恒

拾遺愚草上 [illegible] 右大将頼朝

拾玉集冬 [illegible]

山家集下 [illegible]

続拾遺 [illegible]

新千載雑下 [illegible]

拾玉集三 [illegible] 前大僧正慈円

山家集上 [illegible] 法眼慶融

長秋詠藻上 [illegible]

金葉雑上 [illegible]

拾玉集五 [illegible] 西行

続古今恋一 [illegible] 静賢

新古今哀 [illegible] 正三位季経

同恋一 [illegible] 伊勢大輔

月清集上 [illegible] 源重之

同下 [illegible]

続後撰恋 [illegible] 皇太后宮大夫俊成女

拾遺愚草上 [illegible]

新勅撰恋上 [illegible] 修理大夫顕季

月清集上　いつくまてさそふ秋をか惜むとて　なかむれはみな月のみ山　中山大臣家大夫俊成

後拾冬　さらてたにかはるへき涙のかけを　なかめつゝ今宵もいたく　永福門院少将

玉葉恋二　袖ぬらすなかめの末の露も月影に　なかむれはたゝ月のみそ　藤原為相朝臣

新後恋五　うきまつにおもひをかへて今宵　なかめつゝ宵の霞の有明　藤原為家朝臣

続古秋上　名にたかき鴫たつ沢の秋の水　なかむれは袖にぬれまさらん　藤原信実大納言

新葉雑下　玉津島浦の浪の底に月をと　なかむれは心にしみて秋の空　宣政門院

拾玉集二　まつくれなゐのあすかをとめて　なかむれはすゑ山の端に　慈円

新千雑下　うき身には忘れかね宿るとも　なかめつゝ昔を忍ふかは　津守国冬

後撰恋一　秋の田の穂にいてゝいはぬをか哀れと　なかむれはしたに思へは　よみ人しらす

続後拾雑下　幾夜ともいさ月影に猶かけて　なかめつる月はいくよの　前権僧正雲雅

風雅恋五　待わひて心はかなの恋のうちにそ　なかむれは秋の夕くれ　永福門院

古今恋三　はかなくも我まつ人をあか月の　なかめくらしておきて　大江千里

壬生二百　みかさ山峰さしのほる月を　なかむれは月もあはれに　壬生忠見

新葉雑中　ねさめして昔をしのふ袖ぬれて　なかめやる雲のかなた　権中納言経長母

拾玉集一　我心きよみかたにもいるに　なかむれは我のみなかれて　慈円

新千秋　いつか秋は涙とともにいはねとも　なかむれはたゝ秋風の空　前大僧正慈鎮

続古神祇　石清水末の流れをくみて　なかむれは宮井にすむ　太上天皇

新葉神祇　神もさそあはれとみむ秋の夜の月　なかむれはいつはりのなき月　権大納言

新後恋下　うきの一つらさそまされとも今宵　なかむれは花の色のうつる　前大納言為世

続千雑中　雲はれて月のひかりのけふ　なかめても月ひとりのみ　伏見院

玉葉恋二　なかむるもかはらぬ人の心をも　なかめてもしのふ思ひの　権中納言

風雅恋三　衣手もさりともしのはれて　なかめても月に忍ふ　徽安門院

新後恋五　今はとてわかれしまゝの月に　なかめてもかはる心の　権中納言為定

続千雑下　いつしかと月の夜ころの心もて　なかめてもたえぬ心の　惟宗忠秀

新後雑下　またなれぬ月のかけもなくて　なかめてもやさしくもあらむ　常盤井入道太政大臣

続千秋上　昔みし秋のみ山の月影を　なかめてもこゝろひとつに　今上御製

新葉雑下　忘るやおもへはそれとも　なかめても心の月の　後村上院御製

続拾遺　さらてたに露も涙もあはれとて　なかめても袖にやとれる　従三位藤原為子

玉葉雑一　天津風乙女の袖にふれてなき　なかめても人の心の　前中納言定家

新千羇旅　いつのまにかはらぬ秋の夕暮に　なかめても月にやとりの　前大納言為氏

続千恋四　夜もすからわかれし後の恋の水　なかめてもおもひしれて　前権僧正実超

同恋五　なかくもなかりけり月をみて　なかめても人にしらせん　前大納言為家

同恋四　今はとておもひあきらめてし　なかめてもうつりなからん　前大納言尊氏

新千羇旅　人の世はありてもなく我のみ　なかめてもあはれ昔の　康資王母

続後拾恋一　かの国のよその浦山の夕暮に　なかめても我身にしらぬ　忠峯

拾玉集二　よのなかにみつるもとの影　なかむれはこの世にまた　

古今秋下 ちはやふる神なひ山のもみちはに おもひはかけしうつろふものを よみ人しらす

壬生二本上 心ゆる岩ねにかはる中絶て おもひの緒ぬ絶まもなけり 読人不知

後拾遺 待つていくらひ月をまつらん おもひやられてひやかなる

拾玉集七 みのむかしよりみるにいかならん おもひくれぬる露の浪を

同三 清井よさらへんもきこえけり おもひもれやそ明の

山家集 風もうし花をちらせつらせん おもひもれわしまる 世まし

拾玉集三 さてもさらへんはなの風をきく おもひくれ林の雪

新続古雑中 谷ふかきいつら輝くひかりまちて おもひもるあさちの世をしらぬ 源満元朝臣

新葉巻三 いつかみむ花のもえぬる夕暮 おもひもする心をしのひの 中原章言朝臣

狭衣三 行くへなき雲のよそにそ吹にけり おもひかねつるみにしあれ 小野小町

古今雑下 あらねはそよとやらて世中を おもひあれし我もの山まて

拾玉集一 もろともにやとりてあはれなる おもひかれし夜はるる

続古今巻 恋しきのことのはかりをまちて おもひはれやつるかな 土御門院

千載巻一 いまはまた袖に時雨そくらん おもひあれ家にかくれ 賀茂重延

玉葉雑三 ひとりせしあきのかせにそのなき おもひそめて冬の雲と 宜秋門院丹後

山家集下 世中はよしなかりけるもとより おもひたえるとなりぬる

新勅巻二 うちみても我身をふりて嘘の おもひあれてさかりける 従三位家

詞花巻上 あやしくもおもひたえぬ山に おもひしのひのつけて地に 同

壬生二本上 あはすらん秋の心にかれまさらん 思ふことすの月をみそこにける ことまれ

後撰巻四 かはらぬ柿のこそりもかきらぬあさ 思ふまへかとよそもなからん

拾遺員外上 さしめてしつしかのの時雨まで 思ふまにかゝるにと見ゆ

後拾巻一 世の中をあちはもなうすかけは 思ふまにかの秋の光にいと 良暹法師

山家集上 誰すむらん月の光のさきよ風を 思ふまとそれ時のかけの秋

拾玉集一 こしぬるかあさまのけおちて 思ふまさらに宿の輝き

後撰巻四 秋をそや今なかさの言あらん 思ふまにあくるなかさん

同巻又 いつかしぬ人のきせさかぬ 思ふまもなかさのさらん 伊勢

壬生二本上 あてすて波の浦の舟 思ふあはれうきよそん 中務内侍

拾遺巻重 さきとへ人をあはれとよはるる 思ふなき人の言の葉の雲

後撰巻云 時なきもとをかしてさもなく今日 思ふまにそみの輝のかへり あさちか

新続古巻又 我もこそ我もにたるへし 思ふことあねぬ人のさるる 大江茂重

拾遺巻草下 うはのにかひて年のつくとせんき 思ふこしか秋のあさきそ

玉葉雑又 うきたらすめの世中をよ 思ふことし雲の雲そふの声 思ふ今に左衛門督

新拾巻 いかにて鶴の林にゆきうと 思ふとくあそれかれかくの 勝西上人

千載秋下 雲のへん雑ものを時しと 思ふとくあそうてさきの空 前大僧正行尊

拾玉集四 あかなしからぬ夢をいそ 思ふとくうさかか世くもり

同一 霧なしよりもおもきをかたしに 思ふとしてそ宝蔵へかれ

長秋詠藻下 霰ふれはむしろの上につもる夜は 思ひやるこそ物は悲しけれ
拾玉集二 結ふ氷も水もひとつにて 思ひとけても物そかなしき
壬生二品中 わかれゆく人の心の秋の色も 思ひいぬるも秋の寝覚さ
山家集 今更にきえむとおもふ身なれとし 思ひさためてなにをかいはん
壬生二品上 世の中にありやなしやと夕暮の 思ひ絶ぬるこゝちなりけり
続千載羇旅 今こんと頼めし人もあらなくに 思ひたつらん旅ぞ悲しき よみ人しらず
新千恋 夜の山の鹿のねさそふ秋風に 思ひをそふる夕暮の空 権中納言俊忠
拾遺愚草外上 さても猶花山桜咲にけれと 思ひをつけて帰るなりけり
続拾遺哀傷 なきしあとの山のすゑにまかせて 思ひをそへてたのむ秋かな よみ人しらず
伊勢物語 くれなゐの花をも散らしつるかな 思ひをつけよわたりて帰らん
壬生二品上 水くきのあとにのこれる涙かな 思ひをつくすかたみなりけり
新拾遺離別 わかれてもありしなからの秋風に 思ひをしるき袂ぬれけり 前権僧正教範
壬生二品上 いつまてか山ちの秋の露を見ん 思ひもこえん人のなさけを
続千載羇旅 ゆくさきは波の花のみ立かへり 思ひそへぬる心ちこそすれ 源義行
夫木 あはれにもちきりし人の面影は 思ひをかけて身をこそしのべ
新古雑下 いかにせん世をのかれても住の江の 思ひをすてん方もなき身や 大納言経光
拾玉集四 君か代はうちも寝られぬあかつきに 思ひをみする寝覚なりけり
同六 あはれ今年もくれぬる春の山 思ひをかけつゝ思ひしりかな

月清集中 わすれゆく風の便もまちかねて 思ひをさそふ暁の空
千載雑中 これやこの逢坂山の関なれや 思ひしりても尽ぬ道かな 上西門院兵衛
後撰恋二 東路のさのゝ舟橋かけてのみ 思ひわたるを知る人のなき 源等朝臣
新葉恋二 わか中はいつも絶なむ行末を 思ひかけてもなほやたのまん 前中納言惟継
拾玉集七 見しまゝのむかしの秋のかたみにも 思ひ出てもかなしかりけれ
金葉恋上 春ならぬ人の心の花とても 思ひさそふのいろそかはらぬ 内大臣
拾遺雑恋 まつよりもいまはかたみの面影を 思ひしりてもぬるゝ袖かな つらゆき
月清集下 草の葉のつゆのひとつも消かたに 思ひかきたえ消えぬ身ならば
後拾雑中 さなからの我身をしらて嘆くかな 思ひとへかまたかたみかは 権中納言経平
拾遺恋四 ちりひちの数にもあらぬ我なれは 思ひそめしはかきりなりけり よみ人しらず
万葉恋三 あかねさす吹まく風もとゝまらす 思ひあへぬかなしきは我 前中納言定家
壬生二品上 鶏のひとこゑに夜はあけにけり 思ひつくしていかにかなる身
新勅恋一 冬の夜のあかつきかたの秋風も 思ひはひつゝ身をは忘れし 忠義公
山家集下 そのまゝにあはてのこりし身をそ思ふ 思ひをくりてかへる夕暮
続後拾恋 まてしはしそれもむなしき恋しさに 思ひはしつむ人なとかはれ 法印長舜
続拾遺雑 花盛さかりの山の桜ゆゑ 思ひよするか秋の夕暮 源為善朝臣
続後撰雑中 名にしおはゝ秋の夜すからねさめして 思ひのかたの月をこそ見れ 寂然法師
新勅恋二 あはれまた心をさそふ秋の月 思ひわするゝときそなかりける 藤原信実朝臣

新続古今六　うつりゆく人の心のさそふらし　思ひのこさぬゆふけふりかな　等持院贈左府

新葉雑下　ひとりのみ月にかこちてすくしけり　思ひのまゝに年もへぬらん　源頼氏朝臣

新勅撰恋二　さりともとあひ見ん事を頼むかな　思ひ合せて嘆きこそすれ　権中納言敦忠

拾玉集又　君ゆへにいはぬ色にもなりぬへし　思ひかさねてみぬ人そなき

金葉冬　なかなかに秋をしるしのかきりなく　思ひかへしてつもる雪かな　法印光清

後拾恋四　いかにせんあふ事かたき身のうさに　思ひしてこそみえぬ月かけ　権大納言長雅

千載恋四　忘れてやしのふの里のかよひちを　思ひつゝもかへしてやまん　太皇太后宮小侍従

新後撰恋又　うしとのみ思ひし身にもかはらねは　思ひつゝのみよそにこそへし　源俊平

拾玉集一　いつまてかおなしうき世の雲ゐにて　思ひくらせは月そかなしき

同六　いかにせん露のみしけき秋の野に　思ひしらぬ山のまさかき

壬生二下中　あはれしく夜半に更ゆく月影に　思ひのこさぬ嶺の秋風

後拾恋一　ちることを惜しむ心の下紅葉　思ひのこさすよしのゝ山　前大納言為氏

拾玉集六　あはれなる人の心にしらせはや　思ひのこして花ちりにけり

新続古今恋一　今日もまたしらぬ恋路にまよひつゝ　思ひそめつゝ世にしらせはや　正三位経家

大和物語　ふるさとのみやこもいまは遠ければ　思ひかけてもかひなかりけり

壬生二下中　秋の夜は月にかこちて更にけり　思ひさためぬ萩の下風

山家集下　しるやしらす忘れぬ人のことのはを　思ひすてつゝかはすものかは

新拾遺恋　なさけ人の物をいひしを忘れめや　思ひよらぬは我ならなくに　中納言為藤

新千載恋又　かくしつゝ過ぎし月日のまたもこむ　思ひよりてもぬるゝ袖かな　伏見院御製

新後撰恋二　つれもなき人をうらみぬ我ならは　思ひよらすもかゝる恋路を　従三位長経

千載恋三　ふりにけるわか身のうきをしらぬ世に　思ひやりつゝなかめくらしつ　源師光

壬生二下上　わかれにしいつのさかひの君ゆへに　思ひもよらん人もこそあれ

新千恋二　つらからん人をうらみて何かせむ　思ひかへしてはつかしの森　源清継

後拾遺恋一　たのめこしことのはかりをわすれすは　思ひうらみぬ人もありけり　源頼光朝臣母

拾遺恋三　山のはにかゝる雲こそうらめしき　思ひそむるよりしくれしにけり　御製

玉葉恋一　うき物とおもひしらすはなか〳〵に　思ひさためぬ身をいかにせん　前大納言実教

新続古今秋上　たのむれは人まつ虫の声すなり　思ひたえぬる秋のゆふくれ　前大納言実名

古今秋上　いつはとは時はわかねと秋の夜そ　思ひつくせぬものはなりける　よみ人しらす

続後拾雑下　なかなかにうき世をそむく身なりとも　思ひのこすは月のみそかし　宰相典侍

古今雑別　あさなけに世のうき事をしのひつゝ　思ひわするゝ時のまそなき　読人しらす

拾遺恋一　かくとたにえやはいふきの　思ひたえなん人の心を　藤原忠君朝臣女

新後撰雑下　あつまちのさやの中山中々に　思ひいたさぬ身にこそありけれ　前大納言為氏

新拾遺羇旅　夢にてもみえもやすると旅衣　思ひたつ日の空にしるらん　左京大夫頼経

続後拾雑別　唐衣きつゝなれにしつましあれは　思ひあはせてなくね成らん

壬生二下中　いつかたもうけひきし物をうらむれは　思ひきてこそ年はへにけれ　修理大夫顕季

新後恋六 いつまてか我身ひとつに忍ふらん 思ひ入て住むとはなしに 前中納言定家
玉葉旅 旅ねする袖の上にも露ぞおく 思ひたてそのあしたより 京極前関白家肥後
新葉羇旅 わかの浦の浪のさわぎも知るらん 思ひてぬる夜やあまた見ゆらん 中務卿宗良親王
玉葉雑一 我ひとり人にしらせぬ恋かな 思ひやつきぬ[illegible] 和泉式部
拾遺恋五上 われこそしらねさらぬ身の 思ひやる心のはなる[illegible]
新後恋一 さりともとまつこともなき恋の身を 思ひかへす[illegible]
新拾恋一 人しれぬ思ひのたえぬ身なれは 思ひのほかに[illegible] 隆信朝臣
拾遺恋五 秋きぬとふくかせのおとに[illegible] 思ひも[illegible] 兼世親王
続古雑下 かくてつゐに袖をぬらしてあまの衣 思ひふかみ[illegible] 東三条院
長秋詠藻上 世の中よみちこそなけれ 思ひ入る山の奥にも[illegible]
金葉恋下 もろともにあはれとおもへ 思ひまたるる[illegible] よみ人しらず
拾遺哀傷 さ月まつ花たちばなの[illegible] 思ひ出の[illegible] 皇嘉門院兵庫
新古恋五 世の中は[illegible] 思ひさためて[illegible] 伊勢
新拾恋二 恋しさをつつむとすれと[illegible] 思ひしとけやとまらん 前大納言為定
千載恋二 つれなきを[illegible] 思ひしれともむかしの[illegible] 権中納言通親
拾遺哀上 夏のよは[illegible] 思ひねの夢[illegible] 摂政太政大臣
新続古恋二 たのむる夜の[illegible] 思ひしれぬ[illegible] 後京極摂政太政大臣
同恋四 まつ夜のみ[illegible] 思ひしらぬ[illegible] 中宮大夫[illegible]

千載恋五 何せんにあらぬこの世にて恨むらん 思ひあまりて[illegible] 上西門院兵衛
同恋二 思ひにも燃えてそ消ゆる[illegible] 思ひうきことのみ[illegible] 藤原実定
続千夏 みしか夜の[illegible]月影を 思ひすてつる[illegible] 皇太后宮大夫俊成女
拾玉集三 ちるはなの[illegible] 思ひ[illegible]のみ 前大僧正慈円
続千恋四 つれなくも[illegible] 思ひてしねと[illegible] 藤原雅家
新後拾冬 山人の[illegible] 思ひ[illegible] 寂蓮法師
月清集下 白雲のたなびく[illegible]風の 思ひ絶えて[illegible] 後京極摂政
続古恋五 こぬ人をまつとはなしに 思ひ[illegible] 安嘉門院四条
続千恋四 思ひ[illegible]人をうらみん 思ひさても[illegible] 藤原有忠
続古恋四 袖にのみ[illegible] 思ひさても[illegible] 藤原基経
金葉恋上 待ちわびて[illegible] 思ひ[illegible] 白河女御越中
拾遺恋三 さけばちる[illegible] 思ひつつぬる[illegible] 中務
新後拾冬 ある時の[illegible]山の[illegible] 思ひ入れ[illegible] 源重之女
玉葉恋四 天津星[illegible] 思ひきや[illegible] 小侍従
新千恋三 つき[illegible] 思ひのあまり[illegible] 従三位親子
同恋一 あはれとも[illegible] 思ひやる[illegible] 式部卿恒明親王
新続拾遺雑五 みちのくの[illegible] 思ひやる[illegible] 藤原宗方朝臣
風雅恋二 恋しさは[illegible] 思ひつつ[illegible] 三条院女蔵人左近

新葉雑上　なにはえにしけるあしの山　思ひそめつるよしのかなしさ　冷泉入道前右大臣

壬生二京上　ありあけのつきを見しよりまくまま　思ひそめぬる秋の夜の月

続後撰雑　難波かたいりえにおふるあしのねも　思ひそめぬる秋の夕月　右近大将通忠

千載雑別　昔見しこころのままにうちむかひ　思ひそめてし山の端の雲　藤原実方朝臣

拾玉集三　さそはるるつゆのみかかるしのふくさ　思ひけるかな秋のはつ風

拾遺員外上　こひてふたつの山の岩ねふみ　思ひそめけるうきなのつらさ

続千載三　秋ふかきかれのの風を待ちわひて　思ひそめしよりなくなくそ見る　平貞時朝臣

新葉恋一　みせはやな初山あゐの色ふかき　思ひそめつるこころのかはりを　前大納言為氏

新千恋一　つつしむと初山あゐの色ふかき　思ひそめつるいろをもせなむ　贈従一位為子

拾遺恋五上　これもみなきりゐるくものひまなれや　思ひそめつるかひもあらしな

新古恋四　きのふの雲はかくあはれにも　思ひそめてんことのかなしき　後京極院

古今恋四　あきの田のよのなかのよはのよも　思ひそめてんなかの玉緒　よみ人しらす

拾遺員外　龍田山一もみちにかくれにし　思ひそめて冬の夜の月

後撰一　冬くれは袖こそぬるれ雲ゐなる　思ひそめてしかりの衣

壬生二京上　人のみるまめかはらの月　思ひそめてもしらぬ秋風

新続古恋五　住ひかるてやこなんまつの梢に　思ひそめてもえせざりける　前大納言俊定

拾遺恋五　紅の色ふかくのこるかはらは　思ひそめにしあさかりしかな　よみ人しらす

新後雑下　まとゐしてあそふたはふれに　思ひつつ恨むる心あり　藤原経任朝臣

拾玉集一　うつろふにもきえぬかなしき　思ひつつけて秋をたつねん

壬生二京中　時しあれは鳥もかへりきぬ　思ひつつぬる秋の夜の夢

続撰恋三　人つてにいふことのはの中にこそ　思ひつくしの山のみなかみ　よみ人しらす

壬生二京下　おもへはむかしの人そ恋しき　思ひつけても山郭公

新後恋二　涙をもしるよもすがら　思ひつきせぬ心なるらん　定家法師

新後拾雑別　いつまでも今日のけふこそ　思ひつきせぬこころなれ　藤原為能

新続古雑下　さりともとまちし月日もすきゆけは　思ひつきせぬ浮世の中　法印経賢

古今雑下　唐ころもなれにしつまをこひつつ　思ひつきせぬ世中のうさ　よみ人しらす

拾玉集六　かけろふの露のいのちそかなしき　思ひつきせぬ浮世なるかな

同　かくてのみ月日の末の山の端に　思ひつきせぬ涙なりけり

新葉秋上　小倉山峯のもみちは色にいてて　思ひつきせぬ旅のことくさ　御製

続拾雑秋　晴やらぬ空はたもとに　思ひつきせぬ月の夜半かな　前中納言定宗

同恋三　ちれはまたいたつらに秋の夕霧に　思ひつきにし昔のひとの　藤原雅経

拾玉集六　いつまてかいはてやみなむ　思ひつむ我恋草は

新拾恋三　住吉の浦にうちよせてかへるなみ　思ひはつれとつかはさるらん　前参議雅孝卿

同恋四　ありし世をおもひいてつつ　思ひ捨つるそいかなるうれひ　花園院御製

続後恋一　いつまてかくれなゐふかきそてのうへに　思ひねのみにてはてにし夢を　藤原雅元

秋萩の花ゆゑにはかりそめに　思ひあまりて忍ぶ夜半の衣

壬生二下　下もえの松の煙のくれはてゝ　思ひあまりそ家の末の色　忠見
後撰恋四　人しれぬ思ひやなそと人とはゝ　思ひあまりは絶えはてぬれ　よみ人しらず
拾遺恋四　かきつらねむかしのことそおもほゆる　思ひあまりしはしもやまん　右近大将道綱母
新後拾恋五　にこりなき清きなかれもたえぬれは　思ひあまるをいふをきかん　関白右大臣
玉葉恋五　契りしにかはるつらさの人の心　思ひあまりやとはすなりなん
後葉四　うき物といまさらしらぬ我身かな　思ひあまりもきもとそある
新千恋四　夕暮はうちなかめてもまつものを　思ひあまりのあはれやさし　宜秋門院
新古恋四　うちしくれ今夜の月の影たにも　思ひあまりも打なけきつゝ　後法性寺入道前関白
同恋五　うき身をは思ひしらすやいける身の　思ひあまりに秋の白波　俊恵法師
続千雑上　春秋につけてうつろふ花もみち　思ひあまりは秋のたそかれ　前大納言実家
新古恋四　恨みわひまたしいまはの身なれとも　思ひあまりの夕くれの空　寂蓮法師
拾遺恋五　雲つれなき人の心はうき物を　思ひあまりて袖そぬれぬる
新古恋五　ぬれてほす山路の菊も露の間に　思ひあまりてあはれなりけり　女御徽子女王
新後雑中　何事もなくさむ方はなきものを　思ひあまりてむなしからん　大江忠成朝臣女
後拾恋四　あふことは袖にかゝれる白露の　思ひあまりてあはれなるらん　典侍親子朝臣
新後羇旅　うつゝにも雲にかくれて山の端の　思ひあまりておもひの夕　中務卿宗尊親王
続後撰恋三　いかにせん人のこゝろのうきに猶　思ひあまりて夕暮の空　参議為氏
玉葉雑二　なかなかに君か心のつれなさを　思ひあまりて絶えぬなかめも　西行法師

続古秋上　ながめつゝいかにせよとか秋の夜の　思ひあまされぬ秋の夕くれ　平長時
新葉恋三　松の雪ふりつもりてもしられしに　思ひあまれはくもる袖かな　御製
続千雑上　雲晴れてのとけき光秋の月　思ひあまりのかひもなきかな　二条法印定為
拾玉集一　郭公なかなか声をまつほとに　思ひあまりやなかめやるらん
続後雑上　行末もたえすそなれん今はまた　思ひあまりてやかてなきかな　平時廣
続千恋五　いつはりと思ひしかともいつしかに　思ひあまりてやよふかきもの　典侍親子朝臣
新拾恋三　まちわひてかたりし夜半も今はたゝ　思ひあまりてやうちもまとろふ　前中納言雅孝
新後雑中　わかれしをかきくもりてや思ふらん　思ひあまりせめても袖の秋　前参議基邦
玉葉恋四　来ぬ人もわかれしなきて今はとも　思ひあまりすゝむ涙もなし　新院御製
新後拾恋三　ゆかりとも思ひそめつるさゝかにの　思ひあまりす心もなかりけり　権律師賢宗
拾玉集一　なかめつゝ待人もやあるとてや　思ひあまりすきてもなきぬれ
玉葉雑一　むかしのことも思ひいてゝや今宵こそ　思ひあまりのむせひもこそすれ　永福門院内侍
風雅恋四　うちしのひうちなけきてや待ちかねて　思ひあまりのせきもとめかね　権大納言公蔭
新拾哀傷　今日とてもやすくもなきかなしさを　思ひあまりみちの七夕の空　上東門院
古今離別　みやこいてゝあふ事かたきすまの浦に　思ひのゆへのなかそもてかへん　人麿
拾遺哀傷　世の中は憂き身の果てに見えてこそ　思ひのほかにそれとなき世に　同
続千恋五　我心いかにしけれはうき人の　思ひのやとにかくしとなへつ　永福門院御製
続後撰恋二　恋しさのいたるも今の人なれは　思ひのかきりとそなりはてぬ　前大納言忠良

拾玉集一　年をへてみのうきことを思ふにも　思ひのほかにとをさかるみち　入道前太政大臣

続古今春上　たをりつる梅乃立枝をかさすらん　思ひのほかに[illegible]

蓮生　ゆきまつきすらこそみおもむ　思ひのほかにあさかりける

新古今春上　花ゆへもうきをしらぬは[illegible]　思ひのほかに雑るらん　[illegible]

後撰恋　[illegible]　思ひのほかにしらすかけん　よみ人しらす

後拾遺恋四　あさもりの[illegible]　思ひのほかにとまるかな　よみ人しらす

同三　きくせをもとこそ[illegible]

大和物語　白雲の[illegible]　思ひのほかにきみはいるらむ

続拾遺恋一　君こふる[illegible]神の[illegible]　思ひのほかにあはれ[illegible]

続千載　[illegible]　思ひのほかに[illegible]　相模

拾遺集春　わか宿の梅乃立枝やみえつらん　思ひのほかに君かきませる　平兼盛

幻　うき世には[illegible]　思ひのほかに[illegible]　赤染衛門

後拾遺雑中　ありとてもねぬへき[illegible]　思ひのほかに世にもふる[illegible]　小弁

新拾遺春上　つれなくて梅乃立枝[illegible]　思ひのほかに[illegible]

拾遺愚草　[illegible]梅の[illegible]　思ひのほかに[illegible]

同上　[illegible]　思ひのそこ[illegible]　[illegible]

新千載一　[illegible]　思ひのほかに[illegible]

続千載　さくらちる[illegible]　思ひのまゝに[illegible]　法印[illegible]

新千載恋二　[illegible]　思ひのけふ[illegible]　[illegible]

続後撰恋二　[illegible]　思ひの[illegible]　源俊頼

同恋四　[illegible]　思ひの[illegible]　よみ人しらす

新続古今雑下　[illegible]　思ひの[illegible]　芋持院贈左大臣

拾玉集又　[illegible]　思ひの[illegible]　[illegible]

金葉秋　今夜[illegible]　思ひの[illegible]　大納言経信

金葉恋下　[illegible]　思ひの[illegible]　源俊頼朝臣

続千秋上　今[illegible]　思ひの[illegible]　二条院讃岐

古今恋一　[illegible]　思ひの[illegible]　よみ人しらす

伊勢物語　[illegible]　思ひの[illegible]

金葉雑下　[illegible]　思ひの[illegible]　長藤母の[illegible]

続古今恋二　信濃なる[illegible]山乃[illegible]　思ひの[illegible]　土御門院[illegible]

新古今神祇　[illegible]　思ひの[illegible]　[illegible]

玉葉雑一　[illegible]　思ひの[illegible]　[illegible]

新古今恋又　[illegible]　思ひの[illegible]　[illegible]

山家集下　[illegible]　思ひ[illegible]　[illegible]

新続古今　[illegible]氷の[illegible]　思ひくだけて[illegible]　[illegible]忠定

新拾遺一　[illegible]玉[illegible]　思ひくだけて年そへにけり　[illegible]

玉葉恋六　うきことをつらさにそへてみる今は　思ひくへて袖もしほりき　中納言經親
新後恋二　後はつきあひもぬさきのつきをを　思ひくらふるかひもあられ　信實朝臣
大和物語　かちまけもなくてやはてん君により　思ひくらぶの山はこゆとも
古今恋五　今こんといひて別し朝より　思ひくらしのねをのみそなく　僧正遍昭
拾遺物名　いまこんといひて別し朝より　思ひくらしのねをのみそなく　忠岑
拾玉集一　今へさへ思ひてもなき昔をや　思ひ暮てもそふかるらん
新千恋三　いつとなくまろうてむつれけるその　思ひそめつるけふの細布　正三位經家
後撰恋三　なみたさへまたくれつゝ見えそうか　思ひくまなく人のあらはに　藤原清輔朝臣
竹河　さつきの風よふのさらくはれ　思ひく徒ちきかとみゆく
新續古夜　今はよのうきかのさゝ蟲の声　思ひくゆかん数をしらの歌　一品法親王覚仁
同　飛鳥の山路の水なりも　思ひやりやとつきもうらん　後九條内大臣
玉葉神祇　神よの月の旅ねして　思ひやりや待志賀の音　前大僧正慈源
風雅雑上　花ゆへみの春のまへ　思ひやり白河の水　藤原惟規
壬生二上　方を経てうき山に入ぬとも　思ひやりてん白川の花　後光厳院御製
新續古雑上　時雨ゆく外山の雲は明にけれ　思ひやられぬ秋の夕くれ
後撰恋二　わかれにし人をみてこそ　思ひやりつゝ恋ひわたるらん　きのとものり
後拾遺秋上　籬なる萩の下葉の色をこそ　思ひやりつゝ鹿そ鳴なる　安法法師
拾遺雑恋　雲井なる山の嵐を風に　思ひやりてや過しつらん　御導師淨藏
拾遺雑恋　もろこしの夢に見えしかは　思ひやりてや恋ひわたるらん　壬生忠見
壬生二下　ちはやふるまさかきの葉のもみち葉　思ひやりてや秋の夕くれ
同上　明くれにこの山さとを　思ひやりても猶かなしき
新古恋一　まつ人の秋露にしをるゝそれ　思ひやりても行かたもなし　清原元輔
壬生二上　須磨の浦のもしほのけふり　思ひやりても袖ぬれにけり
山家集下　霜おきのへにもえ出る草　思ひやりても袖そぬれける
續千哀傷　なき人をしのふる宿の秋の夜は　思ひやるさへ袖ぞ露けき　前大納言為家
壬生二下　さひしさはなほみ山の奥の山里は　思ひやるさへ涙こほれて
後拾遺哀傷　わかれけん心をくみて涙川　思ひやるかな深き心を　清原元輔
新古雑上　雲かゝる遠山畑の秋されは　思ひやるたにかなしきものを　西行法師
新拾秋上　夕ぐれや心をしらぬ月の夜の　思ひやるさへ露けかりけり　三条入道左大臣
新千哀傷　冬のよの袖の氷のいかならん　思ひやるさへ涙ふかしと　選子内親王
續千恋二　わするなよ織女こそはおもへども　思ひやるかたそ袖ぬれまさる　藤原兼輔朝臣
新拾羇旅　旅ねする我も衣をうちきて　思ひやるかな都の人を　よみ人しらす
新千雑中　かゝりける世はいつのまにまき　思ひやれともゆかぬ心を　三条右大臣
古今恋一　我恋はむなしき空にみちぬらし　思ひやれともゆくかたもなし　よみ人しらす
新後拾秋上　芦垣のまちかきほとに秋風の　思ひやるかな遠き里まて　前大納言為氏
新續古秋一　夕暮やそれとも分かす山の端の　思ひやるかな遠き月影　法眼宗鉄下

壬生二百首上　久堅の月の桂もまつきさるく　思ひやすすむ宿の卯の花

拾遺愚草上　いつまてかむかしふけてもつきも　思ひやるへきむかしきまれ

続拾遺中　木のめはる春の山田を打かへし　思ひやるほとに今そ恋しき　よみ人しらす

同恋一　このめはる春の山田を打返し　思ひやるほとに人そ恋しき　同

拾遺恋三　わかさちはこの雨にとぢる道　思ひやるほとに今そ恋しき　紀貫之　同

拾玉集二　都まても見ゆらん山里は　思ひ残さきこえぬなをも

拾遺愚草上　山桜まてともいそかぬそて　思ひやるへきこと葉の花

続後撰恋三　忘れなてふとく思ひて待ち　思ひやるとも忘れもせぬほと　業平朝臣

伊勢物語　わすれてはゆめかとそおもふ　思ひやるとも忘れもせぬほと

新古今恋四　君もまたうつれの世をわかれて逢　思ひやるとも今はたのまん　寂蓮法師

拾玉集六　うちふしてそのかみはるかにしのふる　思ひやるかたに夜はあけにけり

新後拾遺恋四　さらぬ世のわかれのなきはたのまれぬ　思ひやるへきかたもなきかな　寂然法師

新葉恋一　夜のほの芦火の煙たえまなく　思ひこかれてふかき思ひに　開白左大臣

拾遺冬　かきくらし吉野の里のこの里は　思ひやるへき道もたえけり　つらゆき

続後拾遺雑上　今さらに世すてのかへの思ひつる　思ひそやれ跡なき木葉ちるらむ　安法法師

同羇旅　草枕むすふかりねのうつり香　思ひそやれ旅寝の露の柱　惟明親王

続古今冬　天の原空のなかにも雪ふり　思ひやれ身にしみるかの山　後京極摂政

壬生二百首上　うちわたす扇の風のそよく秋よ　思ひそやる萩の咲く庭

拾玉集五　とくなはつけてくのさきまさん　思ひやる秋の夜の月　左大将

同三　露の行方みやまのさとの秋をは　思ひこそてらさみえかけて　よみ人しらす

同六　いつまでか我ひとりさとりのそ　思ひやられておしむさそく

新勅撰恋二　あきしのの河原の里のあはれ　思ひてぬれはあまみしつ　後京極摂政

続千載雑中　年月をふるさと深くなりにけり　思ひてなくさ世をやいふる人　妙光寺内大臣

新葉雑上　わかすみしいにしへ人の思ひ出の　思ひつらねてきよみのさと

玉葉旅　旅の空名残の影のかつらきまれ　思ひてのちもゆくへそつらき　前大納言為兼

新拾遺雑中　むかしの代のきちはにかきつらね　思ひおもふことし心から　正三位有範

山家集　なかなかに花の盛をあはれとて　思ひておほき我か身をや

拾玉集一　いつせんなる月日のへかる程　思ひてもおく年のへぬるか

続後拾遺雑下　うつせみのさくらはしる世のなか　思ひてもあはれなる秋のくれかな　入道前右大臣

風雅秋中　深き山のまきの月をみる人は世に　思ひてもあはれなる秋のほと　西行法師

続拾遺羇旅　月されはまなかたむかきぬる夜　思ひてもわかれかなしきたひね　前大僧正行尊

続千載恋四　いつかれみし秋の夜ことに　思ひあらはせぬ袖のなみたん

拾玉集三　世乃世を待てすまん　思ひあはせて住吉の浜　中納言

同五　いつかは心の秋の夜もすても　思ひあはせて袖ぬれきん

新後撰雑中　たちもはれおもひつらぬる秋　思ひあはせて秋そこひしき　前大納言為家

続後撰恋四　なかれてまた忘れぬ身の　思ひあまりの恋はかなしも　中宗師尚

風雅雑下 めくりこし月日の末を思ふにも 思ひあかすうつゝにものを 章義門院
続拾恋三 梓弓ひくとはなしに引わけぬ 思ひあかすうつゝのそれは 前関白左大臣
新葉恋四 いつはりとみしは思ふと知るべきに 思ひあかすの朧なるまき 右近大将実教
同夜 さもあらばあれ鳥のねに 思ひあかせかの一節ものわび 中院入道一品
風雅恋一 夜もすがらいかなる人にもとめん 思ひあかすらん人もあれ 前大納言為定
詞花恋下 まちかねて月もなかりつるかな 思ひあかせる人もあれ 清少納言
玉葉雑四 うき世の中にはたいなき身の 思ひあかねてもえぞ落来る 建礼門院右京大夫
続古今一 かぞへみよ昔の人のこしかたの 思ひあかねる人の末ぞ 太宰大弐重家
新後恋一 ひとしれぬ涙の袖のあはれしか 思ひあかりとや重きもかくしらん 藤原基任
新千雑上 下野や室の八嶋にたつけぶり 思ひありともいふ人ぞなき 右大臣
新葉夜 兎見えて深きは下のまよひ 思ひありとも恋ぞゆかしき 右大臣
続後撰恋 恋ぞひとつはなかれて深き後の梅 思ひありさまも人の恋しかれ 後近衛大将実雅
新葉雑中 ながめやる方の末の露ぞなき 思ひあへずかなしかりしの宿 右近大将長経
拾遺恋上 こひわびてはひとりなきかな 思ひあまりかきやりかくらん 土御門院小宰相
明石 ひとりねは君もしりぬや 思ひあまりぬるかさねの衣
続古秋上 夕暮は物思ふことのまさるかな 思ひあれや神の心の
壬生二条上 あはぬ夜のつもる数は 思ひあまりてまちわびて見ん
同下 あかつきの別れを知らぬ人ぞなき 思ひ絶えて今こそ恋しき

玉葉恋四 かくばかり猶も後はの梅さきそ おもひあまれるに宿の軒端に 従二位新宰相
拾玉集一 うき身なる恋ぞことのかぜ おもひあまれぬひとりはかなし
積桂 ひとりねて夜なく月の雨の音 おもひあまれり涙のなみだ
新千恋三 きのふまで待ちてみえつる梅と おもひいるもまた人のつまのみ 前大納言為世
同冬 むすぶ手のしづくに濁る山の井の おもひいるあるは月のかげのみ 従二位家隆
新後拾雑下 いつかまたあふぎのかぜの数かへて おもひいるおくゆかしさぞ 宜秋門院丹後
続後拾雑中 いつまでか心を雲の山のはに おもひいるすゑの行方に 法眼聖兼
続古雑下 いとせめて恋しき時はうばたまの おもひいるかたもなき 平政村朝臣
続後撰雑中 梅もがな恋しき人の山のかげ おもひいるかたのうき身も 源有長朝臣
新葉恋四 うき人ははかなしと思へども おもひおくこころを人に 従二位親隆
新後恋一 あきはてゝ浦の苫屋の夕煙 おもひおくのみとぞ思はん 前右兵衛督為教
新続古恋一 見し人の山のみどりも雲の おもひきやいのちのほどを 前大納言為家
後拾恋一 氷とけて木の葉の空の おもひきや秋の露の 前右兵衛督為教
新拾羇旅 分けてきし跡は見えずの花の衣 おもひしるいつの日の衣 後嵯峨院御製
同恋一 いつはりのなきよなりせば おもひみるすゑの袖の涙を 西園寺前右大臣女
新後恋一 つらきのみ思ふ身をうらみ おもひみる袖の衣 常盤井入道前太政大臣
柏木 さらにまたいかにせよとか おもひみる秋のことのは
続古雑上 ながらへてあり明の月をいつまでか おもひやる秋の心の 按察使堀河中納言

拾玉集二　おほはらや小野の炭竈雪ふりて　思ひ乱るゝ恋やかなしき　前大僧正慈鎮

新葉恋四　くるしきはわか身ひとつのまよひにて　思ひそめてし年をふるかな　正三位知家

壬生二百下　世中はいつもさのみにうきものを　思ひそめてもいつとかさため　よみ人しらず

古今恋一　まつ人のかたにもあらぬむかしの　思ひそめにし君をさそ見ゆ　よみ人しらず

続後撰雑　さりともと思ひしかとも限なき　思ひそめてもたつねぬるかな　皇太后宮大夫俊成

続撰夜　このまゝにみなれしまゝの　思ひそめてもなほ見てしかな　従二位家隆

新千秋下　あきの夜の月をしるへに見し人の　思ひそめてもたのむはかなさ

新葉恋一　人しれぬ我か思ひをそ見えつゝ　思ひそめてもしのふ恋せん　人丸

続古恋四　むかしよりかはらぬものは思ひきや　思ひそめてもくやしかりけり　後徳大寺左大臣

続後拾名　おもひわひかきくらしつゝ　思ひそめてもこひしかるらん

同恋一　いはねとも我か心をしらせはや　思ひそめてはいかにかせまし　前中納言匡房

同雑別　わかれてもまたあふ坂の関なれは　思ひそめてもゆくへしらすも　よみ人しらず

続後撰春　さくらはなちりかひくもる春の日に　思ひそめてはいかゝすへき　参議雅経

続後拾恋三　わかこひは人しれすのみふかけれは　思ひそめてもすくる比かな　よみ人しらず

続後拾遺恋三　露しけきのへのかやはら分すきて　思ひそめてもなほ恋しきを　藤原為忠

新千雑下　山のはの月まつほとのなくさめに　思ひそめにしたゝぬ人かな　藤原雅経

新勅雑一　命あらはあふよもあらんとしても定め　思ひしらするうきよなりけり　殷富門院大輔

拾遺愚草上　いつまてとあはれにあらはと思ひかね　思ひけんことのはそつらき

拾玉集又　君ゆへにいのちをかけてもあるものを　思ひはれてもうらみかねつゝ　藤原忠通

続拾恋四　あまのはら日もなかはなる時わかす　思ひけむ今はつれなき人を恋ひつゝ

続古秋上　何事もおもひなしにはなくさまて　思ひ乱れてゆふくれの空　俊恵法師

拾遺集又　むかしおもふこゝろのうちをしられはや　思ひつゝもはかなき身をしりつゝ　公経公

壬生二百上　行末のあはれをしらぬ我かみの　思ひもかけすたえはてぬらん

山家集上　霧はれて月のかつらの秋風に　思ひしりぬる身こそうきけれ　山階入道左大臣

続後拾雑上　今はよもあらしの風のたえすして　思ひあかしの浦のともしひ

壬生二百上　さりともとたのむこゝろのはかなさに　思ひけるかなあさましの身や　二条院讃岐

続千雑下　人ことの心のうちをしらねとも　思ひつゝしてもいかにあるらん

山家集上　都にて月をあはれとおもひしは　思ひしりてもなほそこひしき　中原師季

続後撰雑　世中はかくこそありけれとおもふにも　思ひしるらん人のこゝろを　よみ人しらず

続千恋又　うらみてもかひなきものを思ふかな　思ひしられてなほそかなしき　西行法師

新続拾雑下　世中をうきものとのみおもふかな　思ひしらるゝ身のうきかな

拾玉集四　みをつくしいかにせよとてあまのかる　思ひしらてもすみかはるらん

新千恋五　こひわひてたえぬおもひのしるしには　思ひけるかな我身ひとつに　右近大将道綱母

山家集下　つらかりし人のこゝろもかはりなは　思ひそめてもうらみやはせん

新葉恋二　あひみてはのちのこゝろのなかりせは　思ひしることもあらしとそ思ふ　堯孝法印

続古恋又　遂にこそあはぬなけきもつもるらめ　思ひしりぬるかひもなきかな　小松院右近

新続古今恋 [illegible] おもひしらるる[illegible] 権中納言雅世

続古今哀傷 たらちねの[illegible] おもひしらるる[illegible] 前大納言為家

風雅恋 [illegible] おもひしらるる[illegible] 尚侍(?)[illegible]

新千載雑中 [illegible] おもひしらるる[illegible] 平宗宣朝臣

新拾遺雑中 [illegible] おもひしらるる[illegible] 前大納言為房(?)

続千載雑上 [illegible] おもひしらるる[illegible] 前大僧正[illegible]

新後拾遺雑上 [illegible] おもひしらるる[illegible] 前権僧正雲雅

拾玉集四 [illegible] おもひしられて[illegible]

新後拾遺哀 つねよりも[illegible] おもひしられて[illegible]月

千載哀傷 入ぬる[illegible] おもひしられて[illegible] 皇太后宮大夫俊成

拾玉集又 [illegible] おもひしられて[illegible] 僧都[illegible]

同 [illegible] おもひしられて[illegible] 勅答(?)

続古今恋又 [illegible] おもひしられて[illegible] 公経公(?)

拾玉集二 世の中[illegible] おもひしられて[illegible] 紫式部

山家集上 [illegible] おもひしりても[illegible]

玉葉恋三 [illegible] おもひしりても[illegible] 従二位家隆(?)

新千載秋 [illegible] おもひしるらん[illegible] 京極前関白家肥後

[illegible] [illegible] おもひしるらん 中務卿[illegible]

拾玉集三 大かたは[illegible] 思ひ[illegible]

続古今春上 [illegible] 思ひ[illegible] 前大納言良教

続古今神祇 [illegible] 思ひ[illegible] 前中納言資[illegible]

新拾遺哀 [illegible] 思ひ[illegible] 藤原為継朝臣(?)

拾玉集四 [illegible] 思ひ[illegible]

千載羇旅 [illegible] 思ひ[illegible] 寂然法師

続千載雑下 世[illegible] 思ひ[illegible] 入道前太政大臣

新後拾遺冬 [illegible] 思ひ[illegible] よみ人しらず

続古今冬 [illegible] 思ひ[illegible] 為道朝臣

新後拾遺雑中 [illegible] 思ひ[illegible] 前大僧正[illegible]

山家集下 [illegible] 思ひ[illegible]

千載恋又 [illegible] 思ひ[illegible] 隆源法師

新拾遺雑中 [illegible] 思ひ[illegible] 藤原[illegible]

続後拾遺雑秋 老の世の[illegible] 思ひ[illegible] 前大納言良教

新千載雑下 [illegible] 思ひ[illegible] 読人しらず

玉葉恋四 [illegible] 思ひ[illegible] 登蓮法師

千載雑中 世中[illegible] 思ひ[illegible] 寂蓮法師

拾遺恋又 [illegible] 思ひ[illegible] よみ人しらず

新後拾雑上　捨やすき身をはおしまて[illegible]　思ひ出は[illegible]　[illegible]

続古雑下　世中のうきにつけても[illegible]　思ひ出は[illegible]　後[illegible]

拾玉集一　[illegible]雑[illegible]　思ひ出も[illegible]

拾遺恋五　世中に[illegible]　思ひ出て[illegible]

拾玉集二　[illegible]世[illegible]　思ひ出る[illegible]

同二　[illegible]　思ひ出る[illegible]月[illegible]

壬生二下上　[illegible]　思ひ出る[illegible]　[illegible]

後拾遺恋三　うき世とも[illegible]　思ひ出す[illegible]　[illegible]

古今恋五　あひみぬもうきもわか身の[illegible]　思ひ出る[illegible]　いかなれは

後拾雑五　[illegible]　思ひ出る[illegible]　中原[illegible]

新拾雑下　[illegible]　思ひ出る[illegible]　宜秋門院丹後

壬生二下上　[illegible]　思ひ出る[illegible]　僧正遍昭

古今雑下　[illegible]　思ひ出す[illegible]　小弁

後拾遺雑一　[illegible]　思ひ出る[illegible]　従二位[illegible]

玉葉恋四　限あれは[illegible]　思ひ出る[illegible]　伏見院[illegible]

風雅恋五　たのむる[illegible]　思ひ出の[illegible]　前大納言[illegible]

続後撰恋五　[illegible]　思ひ出の[illegible]

玉葉恋一　いかにして[illegible]陸奥の　思ひ出の[illegible]　従二位[illegible]

風雅秋下　我心[illegible]　[illegible]月[illegible]　中臣祐春

新後拾雑　[illegible]　[illegible]　定[illegible]

月清集下　[illegible]　[illegible]の月

新古雑下　[illegible]世[illegible]　[illegible]　慈[illegible]

新拾恋三　[illegible]　[illegible]　入道親王[illegible]

拾玉集三　[illegible]　[illegible]

玉葉恋二　[illegible]　[illegible]　太政大臣[illegible]

同恋五　[illegible]　[illegible]　永福門院[illegible]

拾玉集四　[illegible]　[illegible]

壬生二下上　[illegible]　[illegible]　亭子院御製

月清集上　[illegible]　[illegible]

新古恋一　[illegible]　[illegible]

拾遺雑下　[illegible]　[illegible]　よみ人しらす

古今恋四　[illegible]　[illegible]

続後撰雑下　[illegible]　[illegible]　定[illegible]法師

同恋五　[illegible]　[illegible]　躬恒

拾玉集五　[illegible]君[illegible]　[illegible]桃の[illegible]

壬生二下下　[illegible]　[illegible]

風雅雑下 [illegible] 前大僧正慈鎮

新後拾遺恋 [illegible] 正三位知家

新葉雑中 [illegible] 浄範

拾玉集一 [illegible]

新葉恋五 [illegible] 前太政大臣

新古秋上 [illegible] 郁芳門院安芸

新後拾秋上 [illegible] 源家長朝臣

新千哀傷 [illegible] 入道二品親王法守

新後拾雑 [illegible] 寺門院[?]

新後秋下 [illegible] 法印浄弁

新古恋四 [illegible] 西行法師

後千恋五 [illegible] 藤原家[?]

拾遺雑上 [illegible] 太宰大弐[?]

拾玉集四 [illegible]

新勅雑一 [illegible]

新千恋三 [illegible] 法眼[?]

新後雑下 [illegible] 法眼[?]

拾玉集一 [illegible]

新拾恋五 [illegible] 源氏[?]

金葉雑上 [illegible] 六條右大臣

後拾遺雑[?] [illegible] 大中臣能宣朝臣

同恋上 [illegible] 素意法師

新後拾恋 [illegible] 中納言[?]

千載恋四 [illegible] 和泉式部

新後拾恋 [illegible]

金葉雑下 [illegible] 権僧正永縁

後撰[?] [illegible] 従三位頼政

風雅雑下 [illegible] 堀川右大臣

玉葉雑[?] [illegible] 参議雅経

新古雑中 [illegible] 平[?]

新勅恋五 [illegible]

後撰恋二 [illegible]

明石 [illegible]

新拾恋二 [illegible]

後撰雑[?] [illegible]

新千夏 [illegible]

後撰恋[?] [illegible]

拾遺恋一　[illegible]　おもひもよらず[illegible]

拾玉集一　冬はてゝ秋とおなじき風の音に　おもひもあへず雲ぞ[illegible]　[illegible]

続古雑上　風さそふ花を[illegible]雲にして　おもひもあへず時雨[illegible]　藤原[illegible]

金葉夏　夏衣[illegible]のこゝろも[illegible]せよ　おもひもかけぬ[illegible]　修理大夫顕季

長秋詠藻上　[illegible]　おもひもあへず[illegible]

壬生二品中　[illegible]雲[illegible]　おもひもしらで[illegible]

続後拾恋四　[illegible]　おもひもしらで[illegible]　民部卿為家

拾玉集一　[illegible]　おもひもしらず[illegible]

山家集下　[illegible]　おもひもしらで[illegible]

同　[illegible]　おもひもしらぬ人の心を

新勅恋三　[illegible]　おもひもそへて[illegible]　中宮少将

続千雑中　うき事は世に[illegible]　おもひもそへて[illegible]　天台座主慈円

続後撰恋四　[illegible]　おもひもそへて[illegible]　後嵯峨院御製

新勅恋又　[illegible]　おもひもそへて[illegible]　参議雅経

続古雑上　かく[illegible]　おもひもそへてよる[illegible]月[illegible]　権大納言家良

山家集下　[illegible]　おもひもすてぬ[illegible]　皇后宮[illegible]

続拾遺雑上　[illegible]山[illegible]　おもひもすゝむ[illegible]　藤原[illegible]

新後夏　[illegible]　おもひもせぐ[illegible]　[illegible]

千載恋三　[illegible]　おもひぞまさる[illegible]　内大臣

拾玉集又　[illegible]君[illegible]　おもひぞまさる[illegible]世[illegible]　[illegible]

新拾恋三　秋の夜[illegible]桐の葉[illegible]　おもひぞまさる[illegible]　後九条内大臣

金葉雑上　世の中はうき身にそへる[illegible]　おもひすつれど[illegible]　源俊頼朝臣

千載雑下　世間[illegible]　おもひすつれど[illegible]　源俊頼朝臣

続千恋二　[illegible]　おもひすてても[illegible]　前参議[illegible]定

月清集下　[illegible]の夕[illegible]　おもひすてても荻の風

続千雑体　[illegible]　おもひすゝむる[illegible]　赤人

新千恋四　[illegible]　おもひそめ[illegible]　同

拾玉集又　[illegible]世[illegible]　おもひそめ[illegible]　公経公

新拾雑上　[illegible]月の[illegible]　おもひそへても秋[illegible]　前大納言実教

山家集上　[illegible]　おもひ[illegible]

続後撰雑上　[illegible]　おもひ[illegible]　藤原清範

同雑中　[illegible]　おもひ[illegible]世[illegible]　皇太后宮大夫俊成